
平凡少年が幻想入り ～side kou～

最弱なる斬賊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

平凡少年が幻想入り ｝side kou｝

【Nコード】

N6397J

【作者名】

最弱なる斬賊

【あらすじ】

作者、クロンブスの鶏の『平凡少年が幻想入り』の那華川紅での視点の話です。無論、クロンブスの鶏には許可を貰っています。

「普通だね、顔とゲームの腕以外は」と言われる八神零の親友むしろ心友の那華川紅。零と同じく知識がある紅。紅はどのように幻想郷で生きていくのか？

俺の幻想入り（前書き）

あらすじにも書きましたが、これはコロンブスの鶏が書いた『平凡少年が幻想入り』の那華川紅視点の話です。勿論許可は貰っています。

多少のIFが混ざっていますのでそういうのが嫌いな方、コロンブス以外の文を見るのが嫌な方はすぐに回れ右をしてください。

俺の幻想入り

俺の名前は那^な華^が川^わ紅^{こう}。

：どこの厨二が考えた名前だと良く思う。音だけ聞くと厨二でもない。だが：

漢字が厨二すぎる。

まあ、親の考えることは良く分からん。

さあて、永夜抄のルナティックでもやるとしますか。

少年遊戯中：

「ふー、4面撃破ー。ルナティックはやっぱしんどい。一応クリアはできるんだがなー」

ピンポーン

ん、零だな：電話きてたし。

零とは八^や神^が零^{みれん}。俺の親友だ。

本人は自分のこと平凡つつってるが顔がイケメン、ゲームの腕が神つつる時点で平凡ではないと思うんだ。

平凡とは全て抜きん出てる場所がないからこそ平凡なのであって1つでも抜きん出てるものがあれば平凡とはいわない。

まあ、ゲームと顔と性格の厨二が抜けきらないところと神経の凶太さ以外は平凡と認めよう。

…これって平凡と言えるのだろうか。

玄関までいってドアを空けてやる。

「おお、来たか。まあ入れよ」

「おじゃましまっせ」

零を家の中に入れてすぐに永夜抄の続きを始める。

「いや、この家来るのも久しぶりだな」

…はい？ コイツはなんかの電波でも受信したのか？

「お前三日前にきたじゃん」

「ところで紅よ」

「なに？」

「俺幻想入りしちゃった」

おーけー把握、電波完全受信中現在進行形ですわかります。

自分で言っというて訳わからねー。つーかネタだよな、うん。

「そうか、ゆかりんとかに会ったか？」

「ああ、紫と幽香と輝夜と永琳に会った」

なんとという古参メンバー。なぜ高齢の人達にしか会わない。そこらへんが電波かおーけー把握。

「どうせなら主人公に会えよ」

「いやあ、俺がいる時代にはまだお前の後ろにいる奴とかしかいないんだよ」

…俺の後ろ？

「お前の電波にも磨きがかかってきt・・・なんだ夢か」

後ろを向くと紫と思わしき人物がいた。上半身だけスキマから出している。ゲームと現実の姿はやっぱり多少ちがうなー。

まー、夢だからどーでもいいけどさ。夢なら零の電波発言も良く分かる。

俺って幻想入りしたい願望あったんだなー。

「あら、私はあなたの夢の住人だったのかしら？」

ええそうですよ、今現在そうじゃないですか。

「紅、現実から逃避するな」

「馬鹿め、現実にゆかりんはいないのだよ」

あえて気取った口調で言ってみる。

「私はここにゐるわよ？」

現実じゃない夢にはいますね。ここ＝夢ですねおーけー把握。

[illegible]

「目を覚ませ！現実はその甘くはないのだ！」

目の前にいきなりハリセンがあらわれ『紅は4000000000000000000000のダメージを受けた。紅は死んでしまった』との表記が出た。

…なんの電波だ。さすが夢。つーか痛い。痛すぎる。夢じゃないのか…

否、夢でないのならこの事態をなんと説明すればいいんだよ！まさか厨二的な考えが現実になるわけないだろ！

…はあ。現実だと思ふしかないよな…いいよ、もう零に振り回されて楽しんでやろうじゃないかよ。

飯にこれが夢だったとしても目覚めてまた明日が来る。

『アレイズ』

痛みが消えたので起き上がって見る。いやまあ、いつでも起き上がれたんだけどね。

つかアレイズってなんだ、俺死んでないぞ。表記では死んでたが。

「これで信じたか？」

…いまのどこに信じれる要素があった？まー、いいんだけどさ。

「ああ、信じざるを得なくなった」

どの口がこんな言葉をいうのやら。

「よし、じゃあ俺達は帰る。達者で暮らせよ」

おう、帰れ帰れー…じゃなくてだなあ！

「待てよ！今の思いっきり俺幻想入りフラグ立ってたじゃん！」

「冗談だ。で、来るのか？」

行かない訳がない。

「行くに決まってんじゃない」

「一名様ご案内だ。紫、つなげて」

「わかったわ」

さて、俺が外来人…か。実際考えた事がないわけではなかったが現

実になるとは思わなかった。

まー、夢なら夢でいいけどな。

俺の幻想入り（後書き）

他人の書いた小説の設定、セリフをそのまま引用して書くのってしんどい：

セリフに合わせた人格にしなければいけないから r y
その点でしんどいですねえー：

まー、いいんですけど。

幸運すぎるだろ、俺。

俺は今幻想郷にいる。

幻想郷っていうか紫家っていうか。

本当に夢じゃないよな。

：コレが夢だったら泣きたいよ。

ちなみに幻想郷に持ち込んだ品は

PSPセットー（本体＋充電器＋ソフト＋USBケーブル＋メモリースティック）

小説数冊

黒のロングコート

の3点です。

：3点って言えるのか？まーいや。

「幻想郷に来た感想を一言どうぞ」

零が聞いてくる。

「空気がうまい」

「たしかに」

ホントさ、住む場所は空気が美味しい所じゃないと嫌なんだ。

俺達の住んでる街は空気がキレイだったからなあ。東京とかはとっても空気が汚れてるらしい。

父さんと友達から聞いた。

小さい頃に、だけどな。

「えーお前も今日からこの紫家で暮らすわけですが、働かざるもの食うべからずです」

「と言うと？」

「つまり掃除洗濯などの家事を俺といっしょにやるってことだ」

零と同じく：同じとは言えないか、な？

まあ、家事なら慣れてる。

「オーケー、まかせろ。家事ならお手のモンだ」

「だがしかし！もっと重要なことがあるのだよ」

おーけー把握。幻想郷とは危険がたっぷりわっふーい！

…落ち着け、俺。

「…なんとなく理解した。妖怪（死亡フラグ）の回避だろう？」

「その通り！」

「そのためにあなたの能力を今から調べるのよ」

おおう、ゆかりんが目の前に！

まあ、驚かないが。気配消して後ろから近づいて人を驚かすのが大好きな自分が驚くわけないだろう。

ただな…結果が問題だ。

「なるほど…だが能力がついてない可能性とかはないのか？」

「外来人が幻想郷に来た場合は約千分の一の確立で能力がつく」

うえーい、自慢にならねーが俺はそこまで幸運じゃないぜ。

「…ついてない確立の方が圧倒的に高いじゃないか」

「さらに戦闘に使える能力が付く確立はそのまた千分の一だ」

1000000…百万って所か。

「天文学的数値だな」

「大丈夫だ、俺もチート能力手に入れたから」

たしか…可能と不可能を操る程度の能力だけか。

だから充電しないと使えないPSPも持ち込む気になれたんだが……
だって幻想郷に電気があるとはおもえない！

「兎にも角、調べてみましょう？」

さて、どういう結果になるのかね……

少女一（？）測定中……

と、いかどうやって調べてるんだろう。

頭に手を置かれてる……頭と言われて思いつくのは脳だ。人の思考は脳で行われている。

能力の統制も脳が行っている。

秘められた能力があるとするならば脳が隠している、もしくは脳自体も気付いていないと言う事で、分からないと言うことは何らかの境界が生じている、その境界を取り除いて能力を把握するとかそういう所なのだろうか？

……っと、手が離されたな。

「……あなたの今の能力は『空間を操る程度の能力』よ」

たった時間は20分って所か。

変だな、零のときは3分ぐらいで済んだって聞いたが。

っていうか、今の…ってなんだ？能力が変化したり消えたりするのか？

…消えるのは勘弁してくれ。それにしても空間を操る、か。

「空間を操る・・・面白そうだな」

「それはいいんだが紫、今の、というのはどういうことだ？」

「それは俺も思った。どういうことなんでしょうか？紫さん」

「紫でいいわ」

「了解、じゃあ紫、ということなんだ？」

すぐに呼び捨てや敬語をなくすのも気が引けるけどな…

まあ、零も呼び捨てのタメ口だし問題はあるまい。

「簡単に説明するわね、まず普通の妖怪たちは生まれたときから一つだけ

自分固有の能力を持っているのよ。けど極稀に複数の能力を持って生まれてくるのがあるわ」

「つまり俺は…」

あー、なるほどね。…複数とか、どんな幸運さ、俺。

「ご察しの通り。あなたは複数の能力を持っていて、今使えるのは『空間』だけなのよ」

「紫、紅はいたいどれくらいの能力を持っているんだ？」

「…ざつと七つほど」

「……」
「心聞いておくが確立で表すとどのくらいだ？」

[illegible]

600那由多、ねえ。那由多ってどれくらいだったっけ…？

たしか、とんでもなくでかすぎる単位だったはず。

万と無量大数とで考えたら無量大数の方が近いんじゃないかなったっけか。

「…俺は運がいいようだ」

運がいいなんてレベルじゃねーよな。まあ、それ以外の言葉が見当たらないが。

「それを運が良いで済ませられるお前がすげえよ」

「まあそれは置いておいて、今はその能力を自由に操れるようにしないかね」

さーて、自由に：どうすりゃいいんだ？さすがに厨二的なセリフを叫ぶとかは勘弁だぞ。

「：俺やり方わかんないんだけど？」

「大丈夫よ、零が教えるから」

「え！俺？」

零か：不安だ。ふざけまくりそうに進む気がしない。

「あなた意外に誰がいるのよ？」

「誰もいないな」

ゆかりんがいるじゃないか。

まあ、泊めてもらうであろう身として贅沢は言えないのだが。

「じゃああなたがやるべきじゃない」

「そりゃそうだ」

「よし、明日から頼むぞ、零」

「オーケー、さっさと覚えろよ、紅」

残念だったな！俺はものの覚えが悪いんだ。

まあ、すぐに覚えると思うが。もの覚えもそこまで悪いほうだとは思わないし。

「それよりさっさと夜ご飯作ってよね」

「了解」

さて、幻想郷にはどんな素材があるんだか。

そうだな…久しぶりに漬物でも漬けてみようか。

腕が落ちてなければいいんだがな。漬物なんて昔婆ちゃんの家で漬けて以来だ。

まあ…やるとしますか！

幸運すぎるだろ、俺。(後書き)

こんな描写しようか迷うことがあります。

紫「紅、お酒飲まない？」

紅「俺に酒を勧めるな、キレかねない」

零「いいじゃないか、紅。少しぐらい飲んだって」

紅「ふざけんなよ、俺に酒を勧めるな」

零「のめよのめよ、のまのまうえい！」

紅「マイヤヒをうたうな：というか、マジでやめろ。本当にキレル」

紅はお酒が大嫌いです。自分もお酒が大嫌いです。

メイプルで自分がビール好きだとネタを吹っかけられました。

ネタだと理解しててもブチギレました。

そんな自分が自分で書くキャラに酒好き、酒豪を書くことは嫌です。草香とかの鬼なら大丈夫ですけど、オリキャラで酒好きは本当にイヤです。

コロンブスにも嚴重注意を言っておかないとなあ：

親友っていつてますが、コロンブスもきつと自分がそこまで酒が嫌いだとは知りません。言った記憶がないです。

ちなみに自分、飲んだ事がないので分かりませんが絶対お酒に弱いです。

ワインの匂いですら吐き気が催してきます。アルコール臭で。

年をとればアルコールの臭いにも耐性ができてくるのでしょうか。

：イヤですね、そんなのは。

ちなみに関係ないですけど、自分がペットボトルを飲んでたっけ友達（コロンブスではない）にもっと飲めといわれて底を上げられました。

咽ました。おかげで50mlぐらい無駄にして服も汚れました。

友達は笑いながら謝ってましたが：

自分も笑いながらいいいいよと言っていました。

基本自分はキレない人間ですが酒関係だけは本当にムリです。

感情をコントロールできません。ここらへんが自分の厨二な部分な
んでしょねえ：

あれ、案外関係ある？

以上、シリアスっぽい後書きでした。

零が招いた死亡フラグ

とりあえず、俺の幻想入りから1ヶ月近くが経った。

とりあえず出来る事をまとめておく。

空間の転移 物を移動させたりレポートさせたり自分をレポートさせたりってこと。

空間の固定 動きを止める、けど鍛錬不足、能力にまだ完全に慣れてないせいだと思うが強い力が掛かってるものは止められない。多分萃香とか幽香の動きやマスパとかは止められないだろう。

幽香をゆうかりんって呼ぶ？心の中だけでもあまりに恐れ多い。

空間の接続 簡単にいえばスキマ。まあ、さすがにゆかりんほどの能力じゃあないが。結界やらなんやらで阻まれてるとできないっぽい。

結界の作成は零にやってもらった。

空間の消滅 生物は消せない。ただ非生物は消せる。木材とか弾幕とかな。ただあまりにつかれるからそれをやるんだったら転移とかで地面の中に埋め込んだほうが早いとおもう。

空間の歪曲 空間ごとねじ曲げて動くものの動きを変える。だがこれも燃費がわるい。つかれる。転移のほうが楽だろう。きつと。

空間の圧縮 空気の圧縮と捕らえて何にも問題ない。多分やろうと

思えばくまの空気爆弾、名前忘れたけどいいや。もできるとおもう。
あと空気の弾もきつと作れる。というか作れた。

空間の膨張 空気の膨張と捕らえて問題ない。使い道が思い浮かばないが出来た。

空間の移動 転移ではなく移動。特に説明もいらなとおもう。

この程度。

ちなみに自分が漬けた漬物は大好評だった。

「最高だああああ！」

「うむ、我ながらよく出来た」

「天下一品よねえ」

零は柴漬けが好物のようだ。

自分とゆかりんがたくあんが気に入っている。

自分でもよくたくあんの漬け方なんて覚えてたもんだ。

あと柴漬けの漬け方も。

糠と赤紫蘇なんてよくあったなあ。昔だからあって当然なのか？

ちなみに柴漬けは乳酸菌なんてめんどくさいので酢で代用しました。

それにしてもゆかりんが食べる時は全く音がしない。

なんらかの境界でも引いてるんだろうか？

少年少女食事中…

「「「ごちそうさまでした」」」

あー、自分と零の料理はやっぱ旨いな。

「紅、皿洗ったら出かけようぜ」

「どこに？」

「適当に」

適当ってどっちの適当だ？適切なほうかきままにぶらぶらか…まあいいか。

「オーケー」

「よし、じゃあさっさと皿洗うべ」

俺と零だしな、三分でいけるだろ。

「三分以内に終わらせるぞ」

「一分の間違いだろ」

「お前が時間止めれば一秒で終わるだろ」

「面倒くさいからヤダ。さ、話ししてる暇があったら皿洗うぞ」

「よっしゃ」

少年皿洗い中…

よっし終了。

「じゃあ紫、行ってくるわ〜〜あ？」

「どうした？」

「またいなくなった」

ゆゆさまにでも会いにいってるのかね？というか零に時代どれぐら
いか聞くの忘れてたな。主人公達はいないんだっけか？

まあ、ゆかりんの考えてる事を理解しようとするだけ無駄だ。

「気にすんな、ゆかりんの考えることなんてわかりやしないんだか
ら」

「…それもそうだな」

「さ、行こうぜ零。どこに行くんだ？人里か？」

「太陽の畑だ」

「…は？」

さっきの適當って言葉は嘘ですか？どちらの意味でも適應してません。

「太陽の畑だ」

「……………」

あー冷や汗が出てくる。お腹が頭痛で痛いし目がゴミの中に入った。目から鼻水が…

「あゝごめん零、俺お腹が頭痛で痛いからいけないわ」

「落ち着け紅、お腹が頭痛で痛いことはありえない」

「うるせえ！グ○ードさんも『ありえない、なんてことはありえない』って言ってたじゃねえか！」

「あーあれ矛盾してるよな」

「話それたけどさー太陽の畑つつたらゆうかりんいるじゃんよー、絶対殺されるって」

やべ、ついゆうかりんって…あああ、頃される、頃される、頃されるじゃなくて殺されるううう！

「大丈夫だ……多分（ボソ）」

「多分つつったか！今多分つつったろ！」

多分って言いましたよね、聞き間違いじゃないです、俺の耳は天下
一品とまでは行かないが正しい自信はあるぜ。

「うるせえな！どうせいつかは会うことになるんだからいいじゃん」

それは屁理屈だ！何故に今幽香に会わなくてはならないんだ！もつ
と能力が開花したり霊力が増加してからでいいじゃないか！

俺はまだ死にたくないのだよ！零！

「俺はまだ死にたくない！死にたくないん「うるせえ！」ぐへあ！
？」

意識が遠くなる……死亡フラグ回避とか言ってた奴が死亡フラグ立て
やがって……

目の前が真っ暗さ、あは☆

あ、ホントに意識きえる……

零が招いた死亡フラグ（後書き）

この小説、紅があまりにはっちゃけてる気がする。

つーか自分グ○ードさんなんてしらねーぜ？

つうか、幽香に能力がついたただの人間が勝てるとは思えないんです。

零は能力によって反射神経や動体視力を人間を超える事が出来ますが紅の能力は空間。幽香の攻撃を見切る事なんて不可能。

幽香が消えたと思ったら攻撃されて終わり。

ご都合主義で能力が開花してってありますよね。

1つ目の能力発覚からすぐ2つ目の能力発覚ってなんぞ。

まあ発覚するんですけど。

クロンブスは何故にそんな速度で発覚させた？

まあ、あいつが主体ですから。自分はいいつの小説をコピーしてやるしかないですよね…

自分的に気に食わないところをほんの少しだけ修正したりしてますがそれ以外は全然ですよ。

まー、いいんですけど。

急展開は大好きです。だって即効で読める。

ただ間がないと飽きる。

ずっと一定の速度だと飽きるんですよ。

急展開の場合は多少のブレを作らないと飽きてしまうと思う。

そんな最弱なのであった。

とまあ、急展開は自分もそうなんですけどね。

れつつゆうかりん(前書き)

時間が…異常な短さです。

れつつゆうかりん

目が覚めると知らない天井…じゃねえ、空だし。

快晴だ…こういう空はいい。

何で外で寝ていたんだとかはどうでもいい。起き上がって周りを見渡してみる。

少し腹が痛いのはどうでもいいのさ。っーか…

…素晴らしい。少し涙出てきた。

向日葵がとても大きく咲き誇っている。

「…綺麗だ」

「目が覚めたのかしら？」

声が聞こえたから振り返って見る。

…幽香がいました。わっふーい、ここ太陽の畑か。だから向日葵が咲いてるのか。

「目は覚めましたよ…と、というか俺は何故にここにいるんだ？」

「零が連れてきたのよ…聞いてないの？」

初対面の人には敬語で。幽香だから更に怖い。

「残念ですが聞いてないですよ…っと、どうか貴方は誰ですか？」

「私はフラワーマスターの風見幽香。自由に呼んでいいわ」

ふーん、なら少しふざけて見ようか…

「じゃあゆうかりんって呼ばしてもらいますよ？」

「…殺していいってことかしら？」

「さすがに冗談ですよ。ユーカリ」それ以上言ったら「ユーカリとはスパイスの一種であってコショウ、つまりペッパーと比べたら一般家庭に浸透しているとは言えませんが多少有名なスパイスの一種ですよ？ゆうかりんと言おうとしたわけではないです」

よくこんなに舌が回るもんだ。俺。

「…はあ、まあ別にいいわ」

「冗談ですよ。幽香さんと呼ばしてもらいます」

「敬称はむずむずするからやめてくれないかしら」

「初対面の方には敬称と敬語が基本なんですけど…」

「零がつれてきた割には妙に礼儀正しいのね」

「初対面でふざけた愛称をつける時点で礼儀正しいと言えるのでしょうか？」

「まあ…それもそうね」

「ふう…気が重い。何時までも雑談してるわけにもいかないですよ
ね？あいつが俺をここにつれてきたと言うことは多少戦闘に慣れさせ
るため。と、言う事はやらなければならぬわけです。後貴方が
とんでもない強者だった場合のために言いますが、俺の能力は空間
を操ると言うだけ。しかも多少の制限も存在する。しかも身体能力
は全く平凡、もしくはそれ以下。手加減してもらわないと訓練にな
りもしない」

「その辺りは善処するわ」

「有難いです」

「それじゃあ…始めましょうか」

「お手柔らかに…本当にお願ひしますよ。俺は能力があるだけの一
般人なのですから」

あー、怖い。怖い怖い怖い。

れっつゆうかりん(後書き)

じ・・・じかんが・・・

うえーい！時間がないぜええ！

ってことで後書き終了。戦闘描写にも入りません。

次は入れる…ハズ。

というか入らないとおかしな事態。

Let's 幽香

幽香からありえないほどの殺気が出ている。と思う。

ただの妖気かもしれない。ただ一般人の俺でも感じ取れるのだからかなりの量であることは間違いないだろう。

「じゃあ…やるわよ？」

気がついたら体が宙を舞っていた。痛みはない。まだ感じられていないだけかもしれない。

う…痛みが…声は、ださない。途轍もない激痛。出せないでいけるのだろうか？

「」

「マトモに喰らって叫ばないなんて…かなりタフね」

「タフさがウリですからね…違いますか。と、いうか本気で攻撃してきた奴に敬語使う気も失せた。タメ口でいいだろ？…はー、いてえ。マジいてえ」

全然痛くなさそうな口調だが、骨が折れてるんじゃないか。折れたことないから分からないが。

まあ、動いても動かなくても痛み変わらないから折れてる事はないと思う。

手加減してくれたのだろうか？だとしたら有難い。

「視認すら出来なかったから多少速度を落としてもらうか弾幕のみにしてくれると有難いんだが」

「あれでもかなり速度は落としてるのよ？零はあれより強い攻撃を頭突きでガードしたけど」

「あいつは不可能と可能が操れるからいいんだよ…幽香の攻撃を頭突きで防ぐ事が可能になるんだ」

「ふーん…まあいいわ。弾幕でいきましようか」

ふう…一番ありがたい選択肢だ。

「分かった」

空間の移動を使って俺は宙に浮く。

「空を飛べるの？」

「飛べるんじゃない。動いているんだよ」

「何か変わるのかしら？」

「結果的には変わらないけど方法が違う」

「ふーん…まあいいわ。弾幕でやるなら移動しましょう」

「ん、分かった」

幽香が太陽の畑で戦うわけないもんな。

と、というか今の幻想郷の季節は何時なんだろう？

ココの向日葵は四季ずっと咲いてるんだっけか？ 忘れたなあ…

まあいいや。

少女少女移動中…

近くの山までやってきた。ここなら太陽の畑に向かって攻撃でもない限り向日葵に被害が及ぶ事はないだろう。

「じゃあ…再開しましょうか」

「ふう…気が重い…」

弾幕が放たれた。

…あまりに薄い。さらに遅い。コレに当たれと？ いくら当たり判定がゲームどおりでないとは言えこの程度避けられないほうがおかしい。

幻想郷の開花のうすい

「…この程度、なのか？ あまりに薄すぎるが…」

多少挑発してみる。

「あら、ルナティックレベルをお望みかしら？」

「訓練ならそれぐらいの方がいいだろう。きっと」

「分かったわ：能力がある程度のただの人間が避けられるかしら？」

さっきよりもとても厚い弾幕が来る。ただ：穴だらけだ。しかも遅い。FPS30か？ってぐらいの遅さだ。

簡単に避けきると日傘を畳んだ幽香の姿が見えた。

来るか？元祖マスパ。日傘の先端に俺でも分かるぐらいの妖気が集まっていく。

「喰らいなさい！」

「残念、当たる気はないんだ」

とんでもない極太レーザーが自分に向かって飛んでくる。

「転移」

空間の転移を使って幽香の上に移動する。

「何時の間に！？」

幽香が気付いたようだが遅い。

「圧縮、解放、固定」

周りの空気、大体直径2mぐらいを10cmぐらいに圧縮し、即座に圧縮を解放する。この間、0・5秒ほど。

1ヶ月も訓練すれば慣れる。声に出しているから更に早くなる。

元に戻る力はすさまじく、幽香は勿論俺の目の前の空間を固定したのに俺も吹っ飛ばした。

幽香は地面に叩きつけられ、俺の体はかなり高いところまで吹っ飛んだ。

「……わ……た……ら……」

「なんていってるか聞こえねえ」

かなり距離が離れているためなんていってるか聞こえない。

と、日傘の先端にまた妖気が集まってきている。

「転移」

幽香から少し離れた所に移動。勿論正面ではない。

「圧縮」

空気を圧縮して大量の弾を作成する。そしてそれを幽香に対して放つ。

って、幽香がこっちを向いてる？

ってことは元祖マスパの餌食に？ソレは嫌だ。

「転移」

幽香の後ろの所に回りこむ。

「転移」

幽香を空中に転移させる。すぐに攻撃が当たるように自分の近くに。

「え？何で空中に？まあいいわ」

大量の弾幕を発生させて来る。

だが…遅い。穴だらけ。

…当たらない自信はないがな。

「圧縮」

空気の弾を大量に作り出して幽香に向かって放つ。さっき放った空気の弾を回収するのも忘れない。幽香が放った弾幕を含むのも忘れない。

ただ、圧縮させるのに集中し過ぎて幽香がこちらを向いているのに気がつかなかった。

「喰らいなさい！」

自分の攻撃がすぐ幽香に届くということは幽香の攻撃もすぐ自分に届くということ。

：これ当たったら死ぬんじゃない？もう少し攻撃が届くまでに時間があれば：

すぐ目の前までにレーザーが来ていた。

考える時間があれば転移をすれば良かった：

あれ、こんなこと考える時間があつたのか…？

そんな距離あるように見えなかったんだが…止まっている？

即座に転移し、避ける。

「今のを避けるなんて…でもコレは避けられるかしら？」

幽香が元祖マスパを乱射してくる。

通常弾幕と織り交ぜて、至近距離で。

：どこの無理ゲー？

通常弾幕を何とか避けて、元祖マスパがきたら転移してを繰り返していたが、疲れたのか転移が出来なかった。

つまり俺の体はレーザーに飲み込まれるということ…

「ぐべあつ」

レーザーが体を飲み込み、変な呻き声と共に意識が遠くなる。

さよなら、俺の人生。

とまあ、マジで意識が…

Let's 幽香（後書き）

あれ、これってクレーター出来てないっぽい？

強引なIFって事で勘弁してください。

もしくは紅の空気爆弾で吹き飛んだものがクレーターを作成したとか。

あと、これ書いてると最後の方打ち込むのにかなり時間掛かるんですけど…

打ち込む、というか打ち込んだ後に表示される時間というか…

txtファイルでも使おうかなあ…

あと、投稿して3分以内に改定しました。

喧嘩と能力（前書き）

なんでコロンブスはこんなに戦闘力たっぷりな描写をしたんだろう？
個人的には気に食わないのでこの話はぶつとばしておーけーです。
…流れるにだめですが。

裏拳をいなしで零の体制が崩れたところを回し蹴りを叩きこむ。

：本気じゃないからよけるだろ。当たっても氣絶しないだろ。零
だし。

うお、バク転で避けやがった。あいつってこんなに身体能力高くないよな、能力で上げたのか？

…まあ、いい。

零の目の前に転移して左ストレートを叩きこむ。

「死ねええええええええええええ！！」

[illegible]

む、右ストレートで防ぎやがった。

んし、痛い。

「いきなり攻撃してくるなんてずいぶんなご挨拶だな！」

「うるせえ！よくもはめやがつたな！」

「何の話だ！」

「幽香に殺されかけたのはお前の差し金だろうが！」

…殺されかけるほどいじめられてないか？まあいいや。

「あれにはちゃんと訳が『問答無用!』!?!」

もんどーむよーなのさ!

転移で距離を詰めボディীবローを喰らわせる。

「ぐっ!」

零はすぐに体勢を立て直し、後ろに飛んで少し距離を稼いだ。

「先に攻撃してきたのはお前だからな!後悔すんなよ!」

…何か来るのか?勘弁。お前に勝てるわけねーんだよ。

「鉄拳『問答無用の一撃』」

む、嫌な予感。つーかこの時代にスペカルルールないんだから宣言の必要性ねーよ。

「終わりだあああああ!!!」

零の姿が消えたと思ったら目の前で止まっていた。

いや、零だけじゃない。今まで吹いていた風も、木々の漣も全て止まっている。

…なにこれ、新しい能力?

…早く開花し過ぎじゃね？幻想郷きてから一ヶ月だぜ？いやまあ、いいんだけどさ。

とりあえず零の後ろに転移する。

と、同時に全てが動き出した。

零が少し驚いたような顔をしながら問いかける。

「紅…新しい能力を見つけたな？」

ああ、そうか、やっぱりそうなのか。

「…ああ、そのようだ」

後で紫にでも調べてもらおうとするか。

能力はあと五つ…か。

まー、期待せずに待ってるとしますかね。

喧嘩と能力（後書き）

どんな御都合主義ですかー。っと。

うえーいわっふーい。

ご都合主義ばんざーい！でもないですけどねえ：

特に書く事もないので後書き終了。

と、いうか眠いです。

あといつ書こうと迷っていましたが自分は休日の前日、休日にか
更新できません。

：なんというややこしさ。

能力発覚ー…と眠さ。(前書き)

眠い状態の時に書きました。

眠さMAX文です。よんでて眠くなっても知りません。

能力発覚ー…と眠さ。

…眠い。

正座して目をつぶってこっくりこっくりしてる。

ちなみにまた紫に頭に手を置かれています。

「どうだ？紫」

…眠い。

「分かったわ」

…眠い。

「紅の二つ目の能力は…」

「ちょっと待って、こいつ起こすから」

…俺はまだ寝てないぞ？

「…い「っしやあ！」グアッ!？」

…眠い。痛い。

少年悶絶中…

「お前、普通に起こせ…」

まだまだ眠い…目が半分閉じてる気がする。

「その考えはなかった」

まったく、痛い。たんこぶが出来てないか頭をさわってみる。

「で、もう言ってもいいかしら？」

「「おーけー」」

「紅の二つ目の能力は『時間を操る程度の能力』よ」

時間、かぁ…だから時間が止まったからあんなふうに戻り全部が止まったのか？

「紫、もう一回言って」

「『時間を操る程度の能力』よ」

ん？幻想郷で時間っていったらもっと大切なことが…あれだ！

「…紅」

「言いたいことは分かっているさ」

「PAD長だな」

「ああ、PAD長だ」

へいぱっどちょー！

…ねむいからかな、テンションがおかしい。

「おめでとう、完全で瀟洒な執事の誕生だな。燕尾服創ってやろうか？」

「さすがにそれは勘弁してくれ」

「何意味不明なこといつてるのよ」

おっと、紫達がいたのを忘れてた…

「まあ気にしないでいいよ、ただのネタだ」

「余計に気になるわね」

「いくら紫が頭よくてもこればかりは理解できないよ。なあ紅」

「ああ、さすがにこれはな」

まだその時代に達していないからな…分かる筈がない。

「レン、そんなことより約束を忘れてないでしょうね」

あいつ約束なんてしてたのか？

…死なないだろうな？

「忘れたの？何でもするって約束でしょう？」

「思い出した。で、なにがいい？」

「あの時私たち決着つけてなかったわよね？」

零、さよなら。お前が誘ってくれた幻想郷は楽しいぜ。

あー、眠い。

「いやあ、あの時続けてたら俺が負けてたと思うぜ」

「けど決着はついてないじゃない。だから…」

「…だから？」

「死合しましょ♪」

ふむ…試合じゃなくて死合って俺には聞こえたな。

「まだ死にたくないんだけど」

「死合♪」

「いやだから「死合♪」…まじかよ」

「明日の正午、太陽の畑で待っているわ♪」

そうって幽香は夜の闇へと消え「あ、そうそう」…なかった。

「来なかったら…分かるわよね？」

幽香は寒気がする微笑を零に向けていなくなった。

俺と紫が口を揃えてこういう。

「「…ご愁傷様」」

「明日骨は拾わないぜ？骨すら残ってなさそうだからな…」

「…」

零は無言だった。

ドンマイ、零。

能力発覚ー…と眠さ。 (後書き)

眠い…眠い…眠い…眠い…
そして短い。まあいいのぜー…
寝てきます。

味噌汁と漬物

…うまい、がもうちょっとコクがあってもいい気がする。

「…これでどうだ？ 紅」

「…若干だがコクが足りない。もう少し煮干を入れたらどうだ？」

「やっぱりか、しかし鰹節ももう少し必要だと思わんか？」

鰹節…鰹節か。鰹節でもいいな。

「なるほど…いいんじゃないか？」

死ぬ思いをしたゆうかりんから1ヶ月が経った。

時の流れって早いなあ…

ちなみに空間も時間もかなり使いこなせるようになった。

空間の停止と時間の停止を組み合わせる事によってかなりの停止能力を得た。零いわくよほどの事がない限り干渉を受けないだろう。

…多分。

とのらしい。元祖マスパも防げるのかな？

…あれはよほどのことの中に入るよな。

ちなみに俺と零は味噌汁について話し合っている。

コイツの作る味噌汁ほど旨い味噌汁を俺は飲んだ事がない。

だがコイツはまだまだ上を目指すようで…俺も手伝っている。

俺がコイツなみの味噌汁をつくる？無理です。

ん、そろそろ朝飯の時間だな。

「零、そろそろ朝飯の時間だぞ」

「もうそんな時間か、今日は何にする？」

「たしか良い卵が入ってたはずだ。玉子焼きでも作ろうか。中にハム入れて」

この時代にハムなんて存在するのか？っておもってたけど紫は何故かいろいろな物を持ってくる。

…俺達の時代からもってきてるのかなあ？それともっと先かなあ？

「あとこの味噌汁と、お前の漬物、もやしがあるからおひたし作るか」

「よし、決定。早速調理開始だ」

そういやコイツが柴漬け食いまくるせいでそろそろきれるんだよな…また作らないと。

少年調理&食事中：

「ふう・・・食後の一服は最高だな」

「そうだな、食後の一服をリボ○ナポリンでするお前はどうかと思うがな」

食後の一服は炭酸じゃだめだ。緑茶とかほうじ茶とか煎茶とか麦茶とか飲め。

「ん、紅はリボン○トロンの方が好きだったか？」

「そういう意味じゃねーよ。茶飲め、茶」

シトロンの方が好きだけどさ。

あれ？ナポリンとかシトロンって北海道限定じゃなかったか？まあいいや。

「よしっ！皿洗ったら研究再開するべ」

「ちよいまち、柴漬け切れてきたから漬けなおしてからだ」

「おいおい、切れるの想定して先に作っておけよ」

「お前が予想以上に食うからだろうが！」

「気にするな、ひとまず皿洗うぞ」

少年皿洗い中・・・

「二分三十七秒、この量にしては少し遅かったな」

「ああ、二分三十秒切りたかったところだ」

まあ、十分早いタイムだとおもうけどな。俺達にしては遅い。

「よし、じゃあ俺味噌汁の研究に没頭してくる」

「じゃあ俺は漬物漬けなおしてくる」

「美味しいのよろしく」

「俺が不味いのなんて作ったことあるか？」

「あつたら今頃お前は死んでいる、てか殺している」

「死にたくないからさっさと漬けてくるわ」

「いってらー」

少年移動中…

「よし、開始しますか…」

さあて、たくあんと柴漬け…なんとなく浅漬け食いたくなったなあ。

たくあんと柴漬けほどもんどくさくもないし漬けてみるかね？

よし、そうしよう。

つと、塩やら酢やら大根やら胡瓜やら色々取ってこなければ…

キャベツあったっけかな？あったらキャベツの浅漬けつくるか。

少年作業中…

「ふう、いい感じにできた。これで文句は言わせん」

柴漬けとたくあんをある程度漬けておけば出来上がり。

浅漬けならば漬け終わった。能力使って即漬ける。…すぐに食べたかったからな。

自分で食って見たら旨かった。零にも試食させて見よう。

あー、数ヶ月漬けとかなきゃいけないんだけどあいつのために乳酸菌柴漬けでも作ってみますかねえ…

…めんどくさいんだよなあ、あれ。美味しいんだが。

やっぱやーめた。

「零、終わったぜー」

そういつて台所に移動する。

「あら、紅。久しぶりね」

：ゆうかりんがいました。

「うげ、ゆうかりん」

あ、まずい。声に出しちゃった。

あーあー、寒気がする微笑が。

「…殺す♪」

「すみません殺すのはやめてください！コレ上げるから！」

零に試食させるつもりだった浅漬けを幽香にあげる。

もう間違ってもゆうかりんってよばねえ。

「なにこれ？」

「浅漬けだよ」

「紅、浅漬け作ってたのか？丁度食いたかったんだよ」

「おー、そーなのかー」

つと、幽香が浅漬けを食べた。

「…こんな美味しい浅漬け、生まれて初めて食べたわ」

…そこまで旨かったのか？作った身としてはそう言ってもらえてうれしいが。

「それは良かった…つと、零の分持ってくるな」

「頼む」

浅漬けをとってきて零に渡す。

「ねえ紅、このレシピくれないかしら？」

「すまない…レシピはないんだ。感覚で漬けてるから…」

「あら、残念」

「傘の先に妖力を溜めながら言わないでくれ。無いものは無いんだ」

「おお、やっぱりお前が漬けたもんはうまい」

「まずかったら困る、というか幽香。ホントに妖力溜めるのやめてくれ、怖い」

「分かったわよ」

傘を下に下げる。と、というか家の中でも傘差してるんだな。

紫…は傘差してるところ見たことないな。

今まで全く違和感感じなかったが考えてみるとおかしいよな。

…まあ、いいか。

味噌汁と漬物（後書き）

さあ、そろそろコロンブスに追いついてきました。

：眠い。ちなみに自分は漬物なんて漬けたことはありません。

浅漬け？浅漬けの元使っても漬けたなんていえるのか？

と、言うか時間の能力は漬物を漬けるさいには欲しい能力。

コレさえ使えば乳酸菌柴漬けも10分で終わります。

紅はそれに気付いてませんねえ。

まあ、乳酸菌って時点でめんどくさいですけど。

あるーっひ！おにさーんっに！であーった！（前書き）

時代をろくに調べずに書いています、ご了承ください。

あるーっひ！おにさーんっに！であーった！

あれから半年…時の流れの早さは異常です。

特にやることもなく、能力の修練したり、意味もなく殺気を出せるようにしてみたり…

ほんと、やることがない。インパクトがあることもない。

特筆すべき事があるとするならば幽香の元祖マspaを2発まで止めれるようになったことぐらいだろうか。

それだけ、のはずなのに今おれは地底にいる。

さあ、今日の出来事をさかのぼってみようか…

今日は暇な上に紫も零もないので外にでてみようと思い、外に出てみた。

「人間、勝負をしないか？」

…目の前には鬼が居ました。鬼ってこの時代まだ地上に居るのか？それとも物好きな鬼か？

おっと、この鬼は女じゃない、男の美形です。

「…勝負？どんなのだ？」

「簡単だ。どちらが強いか、ただそれだけだ。敗者は勝者の言うことを聞く」

半年修練してたからな…いくら鬼とはいえ負ける気はしない。

「ふむ…能力を使ってもいいのならば、その勝負受けてたとう」

「能力？人間ではないのか？」

一応人間だがなあ…人外だよなあ、俺も零も

「人間だが人外と言われても否定は出来ない」

「ほう…まあ、良い。ならば私も能力を使うぞ？」

鬼が能力をつかう、か。

…まあ、大丈夫だろう、きっと。

「かまわない」

「その前に私の能力を言っておこうか。速度を操る程度の能力だ」

…速度？まあ、時間には叶わないだろう。位でいったらこっちの方が上だろうしな。

鬼は卑怯を嫌うんだっけか？なら此方も言わなきゃな…

「じゃあ俺もいうか…空間と時間を操る程度の能力だ」

「ほう…まあ始めようか!」

即座に自分の周りの空間を停止させ、時の流れを10分の1の速度にする。

こうすることで大体の攻撃は止めれ、見切れる。

ハズなのだが…

「グハッ!？」

…視認することすら、叶わなかった。

腹が痛すぎて呼吸するのもしんどい。

多分腹を殴られたのだろう。

「知らないのか?速度は重さだと」

どんな、速度だ…

「私の最高速度は光の1000分の1の速度だ」

…ふざけてる。そんなの、幻想郷最速すらも越すじゃないかよ…

「…0.02秒しか保てないけどな」

十分保ててる気がするの俺だけか?

「先ほどの速度は音速。ではないと人体は耐えられないだろう？」

普通は耐えられないぞ？周りの空間を止めていたからこそ耐えれたんじゃない？

「まあ、立てまい。この勝負私の勝ちでいいな？」

喋ることすらままならないので首を縦に振る。

少しの浮遊感と共に俺は地底に移動していた。

多分、地底ってだけだが。あと痛みも引いていた。

「ここは…？」

回想おわり！

「地底だ。ここは地獄でもあるがまだ死に至って居ないものを裁きはしない。鬼やら妖怪やらもここに住んでる奴は多いぞ」

今現在は地獄…まだ旧地獄ではないってことか。

「んで、俺は勝負に負けた。何をしろと？」

「今度地底で宴会を開こうと思ってな。少人数でいいから人間も誘ってくれないか、ということだ」

「…人間以外でもいいか？」

「ああ」

「わかもも「紅！なんでお前こんなところに居るんだ？」 零…なんだ？」

俺の隣にはいきなり零が現れました。はい。

「家に居なかったからどこに居るのかと」

「鬼にさらわれてました、っと。零、今度地底で宴会開くらしいんだ。それに参加しないか？」

「別にかまわないが…俺達未成年だぞ？」

「俺達が酒を飲まなければいいだけの話だ。まあ、法律に引っかかることもないし飲みたければ飲んでいいんじゃないのか？」

「それもそうか」

「ってことで鬼さん、一人勧誘成功。一応人間の人外」

「おう、有難い。あと私の名前は蒼^{そう}だ」

「蒼…か。奇遇だな、俺の名前は紅。蒼と紅か…あとこのバカの名前は零だ」

「バカというなバカと」

「鬼は皆集まってるからな。日時は明後日だ。頼んだぞ」

「おう。そういえば蒼。鬼子母神ってどれくらい強いんだ？」

「紅、無視か？」

「そうだな：速度であれば母さんより私の方が速いだろう。だが、全てを組み合わせると圧倒的に母さんの方が強い」

ふむ：まあ、遭遇さえしなければ大丈夫か。

「そうか、ありがとう」

「じゃあ、頼んだぞ」

「おう、まかしとけ」

さあ、紫と幽香ぐらいしか誘う人はいないな：

ああ、幻想入りする前は交友関係がメツチャ広がったのにな：まあ、人が少ないから仕方がない、か。

あるーっひ！おにさーんっに！であーった！（後書き）

この時代、まだ旧地獄は存在しないはず。

だが、地獄に鬼達や妖怪達住んでいてもおかしくはないんじゃないのか？

と言う考え方。まだまだ数は少ないでしょうがね。

地上の人々が本格的に鬼退治に乗り出すと数が急増すると思います
が…

さあ、鬼のオリキャラ。鬼だから酒を飲まなければやってけない。
…多少、イライラしてきます。

まー、書いたのは自分だから仕方ありませんが。

あと、コロンブスが俺にたまにはオリジナルストーリーを書けとい
われたので書いて見た。

あと鬼子母神の伏線を張れと言われた。

この程度で伏線を張れたとは思えない。仕方がないけど。

酒飲みと酒好きと酒嫌い（前書き）

本来なら後書きに書くべきかも知れませんが：

ガラナとは北海道でコーラよりも先に広まった炭酸飲料です。

詳しくはググってみれば分かりますが、コーラよりも香りと味があ
ります。

ガラナ万歳！

酒飲みと酒好きと酒嫌い

「くははは、飲めるな、この人間！もっと飲め！」

「おうともよ！」

「そっちの人間は飲まないのか？」

キレるな、キレるなよ俺…キレるなよ…キレないようにな、俺。

「あ、いや…なんかすまない」

知らず知らずの内に殺気を出していたようだ。鬼すら怖気づかせる殺気ってなんだコンチクショウ。

とまあ今、零と鬼…名前は知らん。が酒飲み対決をしている。

…良く飲めるもんだな。零。

がっばがっばとすでに鬼と零とで一升空けているが…二日酔い…にはならないか。零だし。

「…はあ」

酒は嫌いだ。理由は言わん。酒の臭いで吐きそうだ。

トラウマ、だからなあ…

伏線でも何でもないぞ、何があろうと本当に言わん。

「なあ、この宴会にでてるやつで母さんに勝てると思う奴がいると思うか？」

…どこから会話が聞こえてくる。

あまり褒められたことではないが盗み聞きは結構得意だ。

「さあなあ…いないんじゃないか？」

「蒼とかどうだ？あいつの最高速なら勝てるんじゃないだろうか」

「いや、母さんだから避けると思うぞ？」

「ははは、違うない！他にはいると思うか？」

「人間が呼んできたという妖怪なら勝てるんじゃないのか？」

俺が呼んできた幽香のことですね。紫はなんか用事があるからうんたらかんたら…で、こなかった。

「ああ、あの妖気の量はな…でも、母さんには負けるんじゃないか？」

「うーむ、微妙なところだなあ…」

悩む様子で話が止まる。

特に面白いことを話さなくなったから蒼の所に転移してみるか。

鬼と言うのは強大な妖気と魔力を持っているため、こういう混んでいる所でも魔力を出してもらわなくても簡単に位置がつかめる。

他の鬼の強大な妖気と魔力によって分かり辛くはなっているが。

あと少し修練を積みれば人間の位置も魔力を出してもらわなくても把握できるようになると思う。

…とまあ、蒼は一人で静かに酒を飲んでいた。

「紅か…どうした？」

蒼が俺に気付いたようだ。

「いや…俺は酒が嫌いなさ。だから大量にいる場所は居辛くてな」

「…すまないな、宴会に誘ってしまって」

「いや、おれは誘うだけ誘って宴会に出なけりゃ良かったんだ。出たのは自分の意思さ。蒼が謝る必要性はない」

「そうか…」

蒼は杯を傾けて酒を飲む。俺は持参したガラナを飲む。その数500mlペットボトル5本。持ち込みすぎな気がしなくてもない。

…すでに3本のんだけどな！今現在4本目です。

ああ、空間の冷却できるかどうか不安だったけど出来てよかったあ！冷たいガラナが飲める。

「…なんだ、それは？」

「ガラナってもんだ。飲んで見るか？」

「ガラナ…？ いや、いい」

「そうか…」

俺と蒼は静かに佇んでいた。

「…なあ、蒼。なんでお前は地上にいたんだ？」

唐突に俺が話を切り出す。

「特に理由はないさ。強いて言うなら暇、だったからだ」

…そうか、まだ鬼狩りの時代じゃあないのか…

「ってことは俺は暇だったから攫われたってことか」

「そういうことだ」

「そーいや蒼はやっぱり鬼子母神には勝てないのか？」

「…前も聞かれたような気がするのだが」

「聞いたっけ？」

「まあ…速さだけならば私は母さんより速いが、母さんは私の最高

速ですら避ける。速度以外に母さんに勝てるところはないから私じゃあ勝てないさ」

「…光の1000分の1の速度かわすとかどこの化け物だ…」

「鬼だからな、人間から見たら化け物だろう」

「違うない」

ハハハ、と俺は笑う。

…蒼がガラナ飲んだらどんな反応するんだろうか、見てみたいな。

「ほれ、蒼」

この時代、炭酸が存在するとは思えない。

蒼に未開封のガラナを渡す。ああ、コレでガラナが残り0個だ。orz

「これがガラナとかいうやつか…?」

「そうだ、飲んでみろ。うまいぜ?」

「そうか…ってこれ、どうやってあけるんだ?」

ペットボトルのあけかたが分からないようです。そりゃそうだよな、うん。

「上の白い所を回せばあくぜ」

「…お、本当だ」

蒼がガラナを口に含み…

「ケホッ、ゴホッゴホッ」

嘔き出しました。

そりゃそうだろうな。炭酸だもの。

「な、なんだこれは、なんか痛いぞ」

「ああ、すまない…俺的には常識だったから。それさえ気に止めておけばうまいぞ」

…確信犯だな！

結局蒼はガラナにはまり、地底でどうにかしてガラナっぽいものを作ることに決めたらしい。

…たしかガラナって何かの実つかってたよな？無理じゃね？

酒飲みと酒好きと酒嫌い（後書き）

訂正かんりよー。

ってことで書くことないです。

まあ、ガラナ最高！ビバ！ガラナ！という自分。

なんで本州でこんなに美味しいガラナが有名じゃないんだろう。

…北海道から出たことないですけど。

あいつのノリにはついていけない

気がついたら半年経っていました。

零に身長追い付かれたー。

…仕方ないんだがな。時間と言う能力が発覚してから体の老い、老いと言えどいいが成長を止めている。

オレが能力を使うのを止めない限り俺が成長することはない。

まあ、能力を併用すると多少威力が下がるから威力が足りないときは能力使用しないが。

ぶっちゃけこれぐらいしかやることないです。なのでやることみつめました。

紫尾行作戦。

やるのは零だが。

これは大分前に話した内容。よくこんなん覚えてるもんだ。

「さて、今回諸君に集まってもらったのはほかでもない」

諸君…オレと零だけなのに諸なのか？

「諸君つつつても俺とお前しかいないじゃん」

「要は雰囲気なのだよ。俺の親友を四年もやっていてそんなこともわからんのか」

全てが雰囲気で押し通せるわけじゃないんだよ。

「逆にこういうアホなボケに突っ込むのが親友である俺の役目じゃね？」

「そうともいう。ともかく、すでに知っていると思うが、改めて今日の議題の説明をするぞ」

説明がめんどくさいからすんごい端折ります。

紫がどっかに行くとき大体スキマを使うから尾行できない。

零なら出来るが、チートつかいまくると気分悪くなるのと同じで嫌らしい。

そこは妥協するなよ。と言ってやりたいが気持ちも分かる。

まあ話を元に戻そう。

何故かたまーに歩きで何処かに行く事がある。

どこ行ってるの？と聞いたけどはぐらかされた。

なら歩きで外に出たときに尾行しよーぜー。と言うことだ。

零いわく通信したいとのことだったが、勿論この時代無線機などない。

俺の能力の修練も兼ねて俺の能力ですることにした。

音というのは空気の振動。あいつがだした振動を俺の耳に伝えればいいのだから、あいつの口の周りの空間と俺の耳の周りの空間を接続すればいい話。俺が出した振動を伝えるのもまた然りだ。

とまあ、こんな感じで進むことになった。

あいつは某蛇ゲーム気取りでいくつぽいが…はつきり言おう。

あまりしらん！

さあ、洗濯洗濯…

「こちらスネーク。これより、スネークイーター作戦を開始する」

スネークイーターってなんぞ。

少年洗濯中…

「こちらスネーク、紫は人里の外れにある村に向かっているようだ、少佐」

つと、零の声が…少佐ってなんぞ。

「把握した、そのまま潜入を続けてくれ」

なんとなくノリ。

「了解」

おお、合ってたのか。

洗濯終わったし漬物でも漬けるか。

さあ、また浅漬けでも漬けるか：そーいーや幽香にレシピつくってねえな。約束も何もしてないが作るだけ作ってみようか。

少年作業中…

さあ、塩を適量いれ『バキッ!』…入れすぎた。チクショウ何してくれやがんだ!

まあ時間戻せばいいんだけどさ。手の中に塩が戻ってくる。

まあ、枝でも踏んだんだろう。一応零の周りを見てみる。

あいつはなんかモニタ作っていった。モニタがある場所にいると作業ができないから空間の圧縮使ってモニターを小型化、転移を使って位置を移動させている。

っと、紫がこっちを見てるな。

「おいスネーク! 紫がこっちの方向を凝視しているぞ!」

「まさか聞こえたのか・・・いや、もし聞こえたとしてもこの林の中だ。」

反射しまくってこの位置がばれることはない。その証拠に、ほら・
・」

紫がこちらから目を離し、再度歩き始めた。

無音ってノーアラートっていうんだっけ？気取って見るか。

「頼むからノーアラートでクリアしてくれよ」

「はは、そんなヘマをする俺じゃないぜ、っと、林を抜けたようだ」

おお、合ってたフラグ。

「とりあえず問題はない、このまま潜入を続ける、オーバー」

オーバーってなんぞ。

まあ、浅漬け浅漬け…

少年作業中…

よし、柴漬けも出来上がり！

「やっぱりついてきていたのね」

おお、紫の声。

「！！！？？」

零は驚いてる様子。

「スネーク！どうしたんだ！スネーク！スネー……ーク！」

見えてるからどうでもいいんだけどね、ノリだよノリ。

さ、無視してたくあんでも漬けようか。

少年作業中…

ついでに蛇少年説明中…

「で、私をつけてきたというわけね」

「はい、その通りでございます」

「まあいいわ、そろそろ教えようと思っていた頃だったし」

「よく分かんが許してくれるならありがたい」

「とりあえずコウもよんでくれるかしら？」

「了解」

「紅？見つかったからここに来て。魔力出すから」

見つかったのは知ってるぜ、だって見てるもの。

あと、大妖怪の紫が隣にいるせいで魔力を出してもらわないと零の位置が正確にはわからない。

紫の位置なら正確にわかるから問題ないんだがな。

「まったく、お前が枝を踏まなければ、ばれることもなかったろうに」

「いやあ、面目ない」

「さ、行くわよ」

紫は門を開け、中に入っていた。

…ん？この表札…

「…零、この表札見ろ」

「表札？なんでそんなもん…え？」

西行寺と書かれてました、ご愁傷様です。

あいつのノリにはついていけない(後書き)

ねっむいっのぜ!

ホント、眠いです。

あと自分、ホントにメタルギア全く分かりません。

ノーアラート? 目覚まし無し?

わからNEEEEE!

発狂しそうなのでメイポやってきます。

生前ゆゆさま

あー、零に時代聞いたっけゆゆさま生まれる前とかうんたらかんたら…

零はへんな所で適当だからなあ、いいけど。

「…お前まだ幽々子は生まれていないって言ってなかったか？」

「いや、Wikiに千年以上亡霊をやっている、って書かれていたから精々千年ほどかと・・・」

「おいてくわよー」

「…とりあえず行くぞ」

「そうだな、特に今会っても悪いわけじゃないし」

ま、千年以上生きているっていう奴らはこの時代生きてて何も問題ないしな。

門の中は広がった。ほんと広い。原作でも宴会とかしてるらしいからコレぐらい広くないとあれなんだろうな。

「紅、生前の幽々子はたしか自分の能力を嫌っていたはずだ。俺達の記憶とは大分違うだろう」

ま、亡霊って言う可能性もないわけではないが。

生前は死に誘う程度の能力、自分の周りにいる人は死んでしまうから自分の能力疎んでたんだよな。

亡霊になった後、死に誘うのを楽しんでるからどうしようもないが。

「たしか…自分の能力を疎んで自害したんだっけか？」

「その通り、あまり気に障るようなことをいうなよ」

それは お前 が 気 を 付 け ろ ！

「そういうことを言うのはいつもお前だろう」

「こっちよ、早くして」

零はあの言葉を見殺して紫についていった。

だからお前は不安なんだよっ！

少年少女移動中…

「また来たわ」

「お久しぶりね、妖怪さん」

…若いな、俺達よりちょっと年上ぐらい、あと多分亡霊ではない。

ってことは暗いほうのゆゆさまか…やりにくいな。

「そちらの方は？」

「私の友人よ」

「俺は零、紫の家で家事をやらせてもらっている。一応人間だ」

くく、一応…な。

「俺は紅、同じく紫の家で家事をやっている。これまた一応人間だ」

「私は西行寺幽々子、幽々子って呼んでね」

トーンが少し低い。やっぱり暗い性格だな。

「けれど、人間なら私に近づかないほうがいいわ。

私は『死に誘う程度の能力』を持っている。近づいたら死んでしまふかもしれないわ」

それは知っている。だが会う気になれるのは能力があるからだ。

時間と空間さえ止めてしまえば時間を操れ、あまりに強大な能力を持っている限り能力を発現させている間俺に干渉は出来ない。

…幽香？時間とめてりや大丈夫だが時間動き出した瞬間にやられるから太刀打ちできません。

「おい紅、死んでしまいうらしいぜ？」

「らしいな、じゃあ近づいてみるか」

あーあー、ノリで言っちゃったがこれって絶対気に障ることだな。

まあ、印象付けるためにはこれぐらいの方がいいか？

俺の周りの空間と時間を止める。

「！やめて！」

かなりおびえたような表情で叫ぶが、足は止めない。

…すまない、ゆゆさま。

「あれあれえ？死なないなあ」

「そうだな、まったく違和感もないなあ」

俺の能力貫かないか少し不安だったが…まあ、大丈夫か。

道で例えたら通行不可、なんとか乗り越えてもピタッと止まる。だもんな。

「俺は『不可能と可能を操る程度の能力』を持っている。死に誘ってもなんてことないさ」

「俺は『空間を操る程度の能力』と『時間を操る程度の能力』を持っている。」

俺の周りの空間を固定してその中の時間を止めればそんな能力効かないのさ」

「…一応人間ってそういう意味だったのね」

ハア、とゆゆさまがため息をつく。

「そういうこと、安心していいと思うよ」

「どうせ俺達は死んでも死なないような輩だしな」

「俺にいたっては死ぬことはありえないからな」

そんな会話をする俺達を見て、ゆゆさまはクスクスと笑った。

死後ゆゆさま

大体6，7年といったところだろうか。

それぐらいの年月が経った。

零に背を越されて癪だったので老いを止めるのをやめ、あいつの背を越しました。

我が成長に一切の悔いはない！

：いや、あるけどさ。背がでかいっていうのはこの時代の建築にあつてないんだよ。

ま、いいんだけどさ。

「よし、あとはこのまま置いておけば夜に食えるぞ」

零は角煮を作っていた。：牛の。

ウマイんだろうか？牛の角煮なんてくったことねえよ。

「つか豚の角煮は食ったことあるけど牛の角煮は初めて食うわ」

「紅よ、幻想郷では常識にとらわれてはいけないのだよ」

「地霊殿のエキストラの中ボスがそんなこと言ってたな」

「名前で言ってやれよ」

…スマン、名前忘れた。

と、足元にスキマが…まあいいか。

ってよくねえ！即座に空間を固定する。

「あらあゝ☆」

零が某教祖な叫びと共に落ちていった。

スキマ出したのって紫だよな？なら用があるってことか。落ちよう。

「あらあゝ☆」

…声はノリです。気にしたら負けな仕様になっています。

少年スキマツアー中…

「「あだっ！」」

落ちる時に空間使って低速にしたから痛くないんだがな。

「って、なんなんだいったい」

「俺が知るか、そこにいる当事者に聞け」

紫が目の前にいる。さ、訳を聞こうか。

「で、いったいなんのために俺達をこんなところに連れて来たんだ？」

周りを見渡すと長い階段。それと幽霊とおぼしきもの。

：冥界、か？白玉楼につながっている階段だろうか、長いこの階段は。

「単刀直入に言うわ、幽々子が死んだの」

「なにい！？」

って、そりゃそうか。思ったより早かったから驚いたが。

「やはり自分の能力の重さに耐え切れなかったのか？」

「そうね、やはりそれが一番大きいと思うわ」

亡霊になった後は能力つかって楽しんでるがな。

ふ、と少し息を吐いてクツクツと笑う。

：どこの不気味な野郎だ、俺は。

「意外ね、もう少し悲しむかと思ったわ」

分かっていたからな。それに普通の人間として生き、死んでいくほうが悲しいさ。

「いや、驚きはしたが遅かれ早かれこうなることは分かっていた」

「紫がこんなところに連れてきたってことは、この上に何かあるんだろう？」

いきなり上に呼び出してはまずいことでもあるのだろうか？

「ええ、道中で説明するからついてきて頂戴」

なんだ、ただの説明か。

少年少女移動中…

ゆゆさまは満開の西行妖の下で死んだらしい。

見つけた時にはすでに体は冷たくなっていたらしい。

危険な西行妖をゆゆさまの亡骸を使って封印。亡骸を使って封印しているおかげで転生はしないらしい。

知ってるから、まあ、うん。

驚いてないです。

「で、幽々子は亡霊になって白玉楼にいます」

「ええ、けど生前の記憶はなくしているからあっちにとっては初対面よ」

やっぱそうだよなあ。

「じゃ、さっさと行こうぜ」

少年少女移動中・・・

「なんじゃお主達は？」

白い髪に髭。刀にまわりに人魂。

どう見ても妖忌だな…

ふうむ、この時代のクセにずいぶんと年をとっているように見えるな、この妖忌は。

「幽々子に会いにきた人間×2と大妖怪だ」

簡潔すぎて面白みがないな。まあいいが。

「なんと簡潔な説明、さすがだな零」

「ふっ、ざっとこんなもんよ」

「何を訳の分からないことを言っておる、人間がここまで来れる訳なからう」

ただの人間ならな…と、いうかここに来たのは紫の力だし。

「いんやあ、俺と俺の横にいる人間、紅は来る事が出来る」

「ついでに紫もいるしな」

妖忌は俺達の後ろにいた紫を見つける。

「これは紫殿、幽々子様に会いに来たのですかな？」

「ええ、この二人も一緒にね。私の友人よ、害はないわ」

確か妖忌は西行妖が満開の所を見た事があるんだっけか？

ならば紫と知り合いでも問題はない、か？

いや、そのどこに紫との接点がある？

ま、いいか。

「つか害はないはねえだろ、虫じゃあるまいし」

「そうかしら？」

「よし、今日の紫の飯はイナゴの佃煮のみな」

佃煮として成り立つだけのイナゴを捕獲しないと駄目か…

っーか砂糖なかった気がする。

「おい零、砂糖ないから買ってこないと作れないぞ」

「そうか、じゃあ後で創るからいいよ」

「謝るからイナゴは勘弁してくれないかしら？」

イナゴうまいじゃんイナゴ。

「まあ紫殿の友人ならいいでしょう、今お茶を用意しましょう」

「気にしないでいいわ」

「「おじゃまします」」

俺達は白玉楼の門をくぐり中に入っていった。

死後ゆゆさま（後書き）

誤字など、受け付けます。
ね．．．ねむい．．．

死後ゆゆさまその二

一応、俺の回りの空間と時間を止めておく。

亡霊ゆゆさまは死に誘うことを楽しんでるはずだ。

だとしたら、怖い。

門をぐり少し歩いたらゆゆさまが縁側でぼけっとしていた。

これでこそゆゆさまだ！

こちらに気がつくのにこっぴど微笑んだ。

「あなた達は？」

「俺は八神零、零と呼んでくれるとうれしい」

「俺は紅、那華川紅だ。読み方は適当でいい」

めんどくさいもの。

「私は八雲紫、紫って呼んでね」

ん、まだゆゆさまと会っていなかったのか？紫は。

「私は西行寺幽々子、幽々子って呼んでね♪」

やはりこれぞゆゆさまだろう！

この明るい性格。でもなんで転生したらこんなに差ができるのだろう？

「さあさあ、中に入って、お茶にしましょう。妖忌くお茶く」

おお、お茶か。いただこうかな。

「持ってくる必要も無い、はい、お茶と、お茶菓子っ」と

零がテーブル、お菓子、お茶のセットを出す。

ゆゆさまならば即効で食うだろう。どのように食べているか時間ゆっく…

すでになくなっている！速すぎ。

「…幽々子、自重しようぜ」

「おかわり」

「…まあいいや、ほれ」

零が新たに菓子をだす。

「すごい、どうやって出してるの？」

「俺の能力に不可能は無い」

こんどこそ時間をゆっくりにしてゆゆさまが食べるところを視認して

や…

って、もうないし。

能力発動する前に食われたら見えねえよ！

「それってどういうこと？」

「俺の能力は可能と不可能を操る程度の能力だ。ちなみにコイツは空間と時間を操る程度の能力だ」

おお、言われた。

「ちなみに私は境界を操る程度の能力よ」

「へー、ちなみに私にも能力ってあるのかな？」

まだ自分の能力に気がついてないってことか？

「あなたの能力は死を操る程度の能力よ」

紫は…知ってたのか？それとも今調べたのか？

「へー、じゃあ貴方達を死に誘ったらどうなるのかしら？」

おお、こええ。

「俺は死なないぞ？死なないことが可能だからな」

「俺は空間と時間が一切動かない結界を創っているから死に誘われ

はしない…ハズ」

能力が俺まで届かないはずだからな。

「私は能力を届かないようにすればいいだけだから死にはしないわよ」

「なーんだ、ちょっと安心した。私の能力で死なないってことでしょ？ 無意識に能力発動させちゃったとしても」

「そういうことだ」

「おかわり」

っていうかゆゆさまいつのまに食ってるんだ。

「…だから自重しろって」

「おかわり」

「いやだから「おかわり」…ほれ」

脅威のおかわりラッシュには零も勝てなかったらしい。

つと、妖忌が茶菓子を持って来た。

「幽々子さま、客人は困らせるものではありませんぞ？ どうぞ、このようなものしかないですが」

「ありがとうございます、えーっと…」

分かってるんだけどね、名乗られてもない名前言ったら怪しまれるし。

「魂魄妖忌です」

「ありがとうございます妖忌さん」

「礼には及びませんぞ…では」

そのまま歩いて妖忌はどこかへいった。

いただいた茶菓子をゆゆさまに食べられる前に食べて見るとめっちゃくちや美味しかった。

「あー、わたしのー」

「これは妖忌さんがくれたんだから…」

「それでもわたしのー」

「いや、もう食べちゃったし」

「わーたーしーのー」

「…むう、俺が食べる前のなら食べるか？」

「たべるー」

時間を巻き戻し、お菓子を食べる前の状態にする。

「ほれ」

「ありがとうー」

：俺だったら食べないな。いくら時間が巻き戻ったとは言え人が食べたものを食べるとは：

と、というか視認してみせる！

時間を100分の1の速度にする。

な…に？

視認できなかったorz

すごいな、ゆゆさま。

死後ゆゆさまその二（後書き）

コロンブスが1話なのを俺が増やして2話に。
文句は受け付ける。

ああ、メイポで130になりてええええええ。

3つ目の能力

あれから大体6，7年。

霊力の最大量を増やすと言う事の利点に気が付いた。

俺の能力は霊力や魔力を込めて発動すると効果が飛躍的に上がる事が分かった。

ま、それでも幽香のマスパは止めきれないと思うが。

現時点で同時に10本を30秒間止められる。

時間操れるから30秒で十分なんだがな。

止めた後に肉弾戦で即終わりだと思うけどね！

んで、霊力の最大量を増やすために霊力をほぼ0になるまで出す、ということを行った。

体にとある違和感を感じたが、特に気にしなかった。

霊力の枯渇だろう：きっと。

今まで霊力が0になったときはこんなにはならなかったが、な。

：さらに1ヶ月。

違和感はすっかりなくなりました。

あと、方法は間違ってたなかったみたいで霊力の最大量が増えた。

この1ヶ月の間でな。

いや、今までも微妙に増えてたんだよ？

でもこの1ヶ月の増加量は異常だ。

例えば俺が幻想郷に来た直後の霊力が10だったでしょう。

そして今まで修練して来た中で増えて、霊力が100になったでしょう。

この1ヶ月で500にはなった。

ま、大げさすぎる例えだがな。

こんなに上がってはいない。あと、今までの修練で90しか増えてないわけがない。

零がなんかしてくれたのかね？

もしくは修行法がとんでもなかったのか…

ま、漬物でも漬けよう…乳酸菌の柴漬けはどうなってるかなー。

少年作業中…

めっちゃいい感じでした。初めて作ったけど上手く行くもんだな。

「おーい、紅。修行するぞー」

正確には修行じゃなくて死合だ。まあいいが。

「おーけー、今すぐ行く」

しょっぱく鳴らないように柴漬けの時間を止める。

もう能力の併用にも慣れました。

100? ぐらいまでなら併用できる。

勿論効果は落ちるが、戦闘でもない限り関係ない。

修行? 併用だって修行だからいいじゃないか。あと併用した状態で修行するのもいいもんだ。能力が強くなる。

「そーいや紅って最近霊力量増えたよな。そこまで気にしてなかったが」

「とある修行してるからな」

「どんなんだ?」

「霊力をほぼ0になるまで放出する」

「…どんな危険な修行だよ」

「大丈夫だ、最大量を1000としたら10は残してる」

霊力なくなったらあぼーんとかいやだからね。

あ、あぼーんⅡ死です。

「なら大丈夫か…でも霊力の最大量ってそんなに簡単に増えるものなのか？」

「お前なら簡単だろう。と、いうかこの1ヶ月で自分でも驚くほど異常に増えたからお前の力使ってるのかと思ったが…違うみたいだな」

「そそ、そんななこと、あ、あああるわけななないじゃないかあゝ」

こいつの動揺はやってないって証拠だからな。

と、いうかうそっぱちの動きしてるし。

「違うんだな」

「ああ」

何か能力発現してたりしないかな、限界を操る程度の能力とか。

「何か能力発現してたりしないのかな…零、調べられないか？」

「俺に不可能はない。が、こういうのは紫に調べてもらうべきじゃ

ないか？」

「それもそうだな…ま、まずは修行するか」

「おう」

常人に…何とか見えると思われる速度で殴り合い、零はうねるレーザー、俺は見えない空気の弾を飛ばしまくる。

（一応）ルナシューターなめんな！

「オラオラオラオラオラオラオラオラオラオラ！」

「むーだっ！むーだっ！むーだっ！」

気が抜けるほうの掛け声は俺です。

少年達修行中…

「つと、もうこんな時間か」

「晩飯準備すつか。ついでに紫に俺の能力調べてもらおう」

「そだな」

「ああそうだ、今日はお前が喜ぶものあるぞ」

「なんだ？」

「晩飯のお楽しみ」

乳酸菌の柴漬け…零はすきかね？

「まあ、楽しみに待ってるぞ」

「おう。さ、今日の晩飯何にするか？」

「新鮮な魚があつたはずだ。刺身にでもするか？」

「おお、いいな。じゃ、まかせた。漬物取ってくるよ」

「てら〜」

たっくあんあっさづっけしっぱづっけわっふーい！

…落ち着け、俺。

少年達調理中…

「よし、完成」

「よし、じゃあ紫呼んでくる」

「ういよ」

紫がいる場所に空間をつなぐ。

…山？

「おーい、紫。飯だぞ」

「すぐいくわ」

「おっけ」

空間のつなぎを消す。

と、スキマが開いた。

「少し待たせたわね。じゃあ食べましょう」

「」「いただきます」「」

「そうだ紫、飯食い終わったら紅の能力調べてやってくれないか？」

「また発現したの？」

「確証はない。だけど少し気になってね」

「まあ分かったわ」

「で紅。俺が喜ぶものってなんだ？」

「ほれ」

「なんだ、ただの柴漬じゃないか」

「いや、乳酸菌柴漬け。俺達の時代で生柴漬けとも言われるものだ」

「…おお！めっちゃうまい！」

少年少女食事中…

「」「ごちそうさまでした」「」

「さ、すぐに皿洗うぞ」

「いや、紅。お前は能力調べてもらえ」

「ああ、そうだったな。じゃ、紫頼む」

「ご飯食べてる最中に調べておいたわ。紅の3つ目の能力は絶対量を操る程度の能力よ」

手を当てなくても調べられるようになったのか。

それにしても絶対量…か、なるほどね。

簡単に言えば最大量を操る程度の能力ってことか。

だから霊力の増加がすごかったわけか。

3つ目の能力（後書き）

なんか無駄に長くなって2つに分けようかと思ったけど、分ける場所が見当たらなかった。

o r z

ああ、メイポのモチベがあがらなああああい！

藍（前書き）

ネット用語が入っています。

消防↓小学生。勝手な推測として、由来が小学生の坊主↓小坊↓消防 だと思っています。

信憑性は全くの0です。由来なんて気にしないでokです。

藍

あれから10年ぐらい…もう時が経つのもなれた。

やることといったら修行ぐらい。

…ま、死ねる修行だけだね！

この時代に弾幕決闘なんて存在しないが、零の提案でうんたらかったら…

うんたらかんならば察してください。あいつは加減を知りません。

ミジャグジ様発狂モード並の濃さの弾幕なんてほんとしんどいです。

いやあ、当たり判定考えろ！空間使って自分にあたる弾幕全部移動させてるからいいけどなあ！

「お前当たり判定考えて弾撃てよ！下手したら大怪我してたぞ！」

いろいろ併用してるから能力しんどいんだぞこんちくしょう！慣れてるけどしんどいんだよこんちくしょう！

「大丈夫だ、俺は痛くないから」

なんという自己中！

…あれ、コイツって俺と同じだけ生きてるんだよな？

大人って他人思いやるだけの心持ってるよな？

…消防だ消防。コイツは精神年齢消防で片付けよう。

いや、悪魔か？

「悪魔か！」

…いや、悪魔じゃない。やっぱり消防だろう。

「そろそろ終わらせてもらうぞ紅！閻魔『d「零、紅、ちよつと来てー」…行くぞ」

…閻魔ってなんだ閻魔って！

ま、いいか。

「ああ」

「こっちよー」

茶の間？なんか客でも来てるのだろうか？

「はいはい、何のようですか紫さ…ま…ま…」

様なんてお前の柄じゃあるまいに…っていうか、何故沈黙するし。

「どうした？零、なにかあった…の…か…」

…おおう、結構な破壊力。自制できないほど精神力ないわけでは…

あ、まずい。零がぶっこわれそうだ。

「可愛いでしょ？今日魔法の森で見つけたんだけど、あんまり可愛いから式にしちゃった♪」

九尾ですねえ。原作だったら確実に藍だ。

…しかし、小さい。これから年をとるのか…自由に年を操れるのか…

…後者はないな、藍の能力はうろ覚えだが式を操る程度の能力のはずだ。

…いやあ、うろ覚えだから自信ないなあ。

「か…」

「か？」

蚊？モスキート？

「かゝわゝいゝいゝゝゝゝゝゝゝゝ！！！！」

零が藍を抱きしめた。

あれ、本当にコイツ…俺と同じ年齢だよね？大体50年以上は生きてるよね？

…大人だよな？見た目はともかく、いや、見た目も20才ぐらいの大人だが中身は精神年齢50歳以上だよな？

…だめだ、事実を再確認すると落ち込んできた。

「何この子！めっちゃ可愛いんですけど！ヤバイ鼻血出る！」

「落ち着きなさい、怯えているわよ」

「おっと、つい我を見失ってしまった」

我を見失ってしまった？アレがお前の素だろう。

「で、さっきの続きだけど…」

「続けて」

「あなた達にこの子の名前を決めて欲しいのよ」

いやあ、ねえ。原作通りにいくべきだろうな。零がこちらを見てきた。

零もそのつもりだろうな。

「紅、俺この子を見てパッと頭に浮かんだ名前があるんだけど？」

ここで橙とか答えたらどうなるかな！

「実はな、俺も咄嗟に浮かんだ名前があるんだよ」

…間違っても橙じゃないです。

「聞かせてもらえないかしら？」

子供っぽいなあ、と感じる時点で俺は零と同じように成長してないのだろうか。

ま、構わない。零と声を合わせ、大きな声で言ってやろうじゃないか！

「「藍！」」

藍（後書き）

実際この話を書くときに多少迷いました。

レミリアとかは500年を生きている吸血鬼ですが、姿、性格ともに若い少女のものです。

それは不老だから生きてきた年月と共に精神年齢が育たないのか？

それとも人ならざるものだから年月と共に精神年齢が育たないのか？

…自分は不老だからだと考えました。

最後の子供っぽいなあ、と感じる時点で

あれは大人になりたい時期の学生が感じることにだと思うのです。

大人でも子供っぽいと感じることはあるかもしれませんが、自分は学生なのでなんとも言えません。

ですがこの行動は子供っぽいよなあ。と感じることはあります。

学生から感性が変わらない。つまり精神年齢が変わらない。

…不老じゃなく、姿も年をとれば老成した考えになるのでしょうか？

所詮、学生が書く小説。大人の考え方で書こうとしても書けないのでしょうね。

まだ大人の考え方を知らないのですから。

…先々週、先週更新をしなかった理由？

メイプルで131レベにしてたからに決まってるじゃないか！

部品！（前書き）

今回PC用語が結構出てきます。いや、そこまで深くないけど。

ネット用語じゃありません、部品です。

PC用語？頭いてええ、って人は飛ばしても問題ないので飛ばしておーけーです。

部品！

九尾の狐、っていうか九尾の狐って多重表現だと思うんだ。

結局名前は藍に決定した。いやまあ、そりゃそうだろうな。うん。

ちなみに原作では藍は紫の家で家事やら色々やっている。そういうことで俺達の技術を引き継がせることにした…と、零が決めた。

…乗り気じゃ、ないんだよなあ。俺は。

いや、藍は可愛いよ？教えてって言われれば教えるよ？教えるのが嫌なわけじゃないんだ。

でも最近ちょっとやりたい事があってね。…まだ実行には移してないんだが、今日あたりに始めようかと思ってる。

まあ、実行するには俺達の時代の金がないと出来ないから零に貰うかな。

とりあえず調理だ…仕込みははじめねーと。

「きーんこーんかーんこーん、ただいまの時刻、5…30。…自分で言っというただのおかしな人だよ、これじゃあ」

…すまない、言ってみたくなっただけなんだ。つたく、まだ零も寝てるのに何で口に出したんだろう。

台所まで転移する。そういや今現在何個ほど能力の多重使用をして

いるんだろうか？

体の老いの停止。

乳酸菌 v e r 柴漬けの時間の高速化。

転移。

…あれ、少ないな。

まあ、いい。冷蔵庫の中身を確認する。

大分いい鰯が入ってるじゃないか！まあ、こいつは零が起きてからだ。

今日こそは婆ちゃん秘伝の漬物を完成して見せよう！

ただ：婆ちゃんはこれだけは盗んで覚えなさいと、秘伝の漬物だけは作り方を教えてくれなかったからな：

柴漬けでも、浅漬けでも、糠漬けでもない。

不思議な味だった。未知の味だった。

勿論悪い意味じゃない。うますぎたんだ。何にも例えることが出来ないぐらい。

世界三大珍味でも敵わないだろう。あの味は。まあ世界三大珍味なんて食ったことないんだがな。

…まあ、やってやるさ！再現、してやるさ。

あ、これやりたいことじゃないです。いや、まあやりたいことだがさっきのじゃない。

………

……

…

どれぐらい集中していたんだろうか、後ろから足音が聞こえてハツとした。

何をしていたかすら覚えていない。気がついたら漬物ぐるぐるかき回してた。

足音の主は零だろうな。あと重なってる感じもするから藍もだろう。

「んあ、遅かったな零」

「藍を起こす最中に何回か逝きかけたからな」

「…把握」

零にいしゃまとも呼ばれたんだろうか？

大分効いたみたいだな。声が揺れてる。

「零、冷蔵庫に良い鰯が数匹入っているんだが…」

「大方紫が持ってきたんだろ。メス？オス？」

「メスだ、しかも背中模様もはっきりしていて、腹も白い。なに
よりでかい」

「完璧だな。さっさと捌くぞ。今日は朝から豪勢な食事になりそう
だ」

「おーけー、二匹で良いか？」

「ああ、残りは照り焼きにして明日食べるべ」

今日は朝から刺身だああ！テンション上がります、マジで。

魚大好きなもの！

藍も目を輝かせてる。ああ、可愛いなコンチクショウ！

「あとは…油揚げの味噌汁でも作るか」

藍が更に目を輝かせ…尻尾が動き出した。

…ああ、なんか零がやばくなってる…が、持ちこたえたみたいだな。

マトモな顔つきになった。さ、俺もマトモに調理開始しようか。

「いいか？藍。鱈はまず腹を裂いた後にえらの方から――――」

以下略。ちなみに朝食で零が鼻血出しました。

…いやあ、大笑いしそうだった。大人—（なのか？）の精神力で持ちこたえたが。

今は8時。俺達の時代の店も空いてないなあ…

…とりあえず、何を買おうか。

CPU：買うなら何かが入ってるの会社の方がいいよな。そしてCoreシリーズ。

冷却装置…水冷式でいいか。ファンとかうるさいし。

マザーボード…ベアボーンでいいかな。いや、ベアボーンじゃだめだ！望みのビデオカードが積めない！

メモリ…どうせなら2Gぐらい積みたいよな。

HD…回転数早くて容量でかいの買いたいなあ。

ビデオカード…ああ、なにがどういいんだっけ、コレじゃダメだ…コレじゃベアボーンでも良くなってしま…うわああん！

っていうか零に金貰うの忘れてた…後で貰うとしよう。

………

………

：

：ハッ、寝ていた。いやあ、某アニメに出てくる眼鏡少年もびつくりの寝付き具合だっただろう。

ああ、昼飯作らないと：

昼飯は簡単に：でも秋刀魚と石狩汁、漬物。秋刀魚ある時点で軽くじゃねえ。石狩汁の時点でも軽くねえ。

ちなみに石狩汁は北海道の郷土料理です。知ってる人も多い：かな？

夜は白玉楼で藍の歓迎パーティー兼プチ宴会があるらしい。量は少なめだ。

零いわく簡単な料理を御紹介しよう。

ふっくら炊けた最高級の白米。

かなりいい感じに焼け旬の秋刀魚。

鮭の骨からダシをとった石狩鍋。

あと俺の未完成漬物。未完成と侮るなかれ、並ではない。

ああ、どうやったら婆ちゃんの味がでるんだよおお！

まあ、それはいいでしょう。このどこが簡単なんだ？そこんどこ零に問いただしたいね。

……

……

…

「ええっと…よし、CPUはcore—770に…」

現在外界です。ちなみに結界は結界が張られていない時間に戻って
くぐりました。

零に20万ほど貰い、色々な部品を買っています。

ああ、さっき気付いたとおもうがPCの部品です。

メモリとか冷却装置とか電源とかモニタとかビデオカードとかまだ
色々探さなきゃいけないものがあるんだよう…orz

少年探索中…

「御会計78520円になります」

「…」

無言で8万円出す。それにしても大分安く済んだものだ。

「80000円お預かりします、1480円のお釣です。また
お越しください」

声が伸びてるのはどうにかならないんだろうか。まあいいか、どうでも。

買ったものが入った袋を受け取る。と、同時に転移。

周りの目？

…どうせ、次に会うことなんか無い。よって気にする必要性も無い。結界の前まで転移して、ふと思う。

自分はどれだけこの幻想郷を知っているのだろうか？

…この世界は、自分が存在しているのだろうか？

自分だけではない。零も、だ。

もしかしたらこの世界は…自分の知っている東方とは違うのかもしれない。

いや、俺と零がいる時点ですでに違うのだろう。

この世界にとって俺達は…なんなのだろう。先ほどの人々のように…気にも、止まらない存在なのだろうか？

俺と零がこの世界に居ないと…この世界は変わるのだろうか？

まあ、確かなのは俺と零が入った東方が存在している、と言うことだな。

それ以外は…分かる筈も、無い。

………

………

…

只今宴会中！そこで質問。

コーラ、ペプコーラ、ペプシックス、ペシ小豆、リ
シトロン、リボナポリン、
ファンレモン、フンタオレンジ、ファタグレープ、カ
ピス
サワー、メソソーダ、
ガナ、ヌーダ、ジンジール、ノンカロリーコーラ。

さあ、この大量の飲料は何でしょう？

…1本存在を消したかな。

答えはおべべ！

いや、冗談です。俺が飲んでる炭酸飲料です。

「ふう…うまい」

…一人で落ち着いて飲むっていうのはいいもんだ。特に何も見ず、
ただ飲む。

え、藍や紫を見てるって？ただそっちの方向を向いているだけさ……
どこも見えていない。見ているとしたら虚空、だろうか。

コイツラみたいに騒がないでゆっくりと飲む。いうか隣で良く酒飲み勝負してるもんだよ。俺プツンしちゃうよ？

「つぶはぁ！もう一本持ってこいやぁ！」

「良い飲みっぷりだ！俺も負けんぞ！」

ああ、ブチ殺しかねん。

……

……

……

今は夜10時。特にやることも無し……寝させて、貰おうか。

「おやすみ」

特に誰に向かって言うでも無しに、一人呟いて俺は眠りに落ちた。

部品！（後書き）

CP関係の話を書くのに自分がCPの知識がなけりゃあいかなだろ
う、と言うことで調べながら書いていました。

おかげでイヤッフウ！な状態です。

色々と知れて只今幸せ状態。

っていうか今回はじめて使ったくせに………
………
……… の使用多
いなあ。

ああ、そうそう感想受け付けてます。

…ないと、なんか悲しいです。

別れ（前書き）

書き方を変えてみました。

どっちがいいか教えて貰えると有難いです。

別れ

「さっき話したとおりだ、紫。俺達は明日、この家を出る」

あれから：大体、50年？

まあ、俺が幻想入りしてから：いや、違うな。

零が幻想入りしてからピッタリ100年だ。俺にとっては約100年だ。

零の提案で決めていたことがある。俺も反対はしなかった。

あ、PC？とづくに完成させている、が俺専用だZE☆

：すいません、調子乗りました。

ネットには不可能を可能にして接続、電気は何故か紫家に通じているのでそれを使用。

性能はスパコンって程でもないけど並よりは良いと自負している。

材料に妥協は無かったからな。いやあ、格安だったと思うね、あれで原材料約80000円は。

：まあ、零の提案に戻ろうか。

俺達はこの家を出ることに決めていた。約50年前に。

まあ、俺達がいる時点ですでに正史じゃないんだが紫の家事は藍に任せる、そのために俺達お邪魔虫ってことだ。

：零の真意は知らない。俺達が紫の世話をする必要がなくなった。だから外に出たくなった：それだけ、なのかな。

「：この家の家事はどうするの？」

「俺達の家事の技術は、この八十年ですべて藍に受け継がせた」

精々藍が来てから50年じゃね？
いや、俺の感覚が狂ったのだろうか？

「…考え直すことは？」

「ない。これは俺と零で何度も話し合って決めたことだ」

思い返すことはあっても考え直すことはないだろう。

後悔することもない。それに、これから後悔するような内容でもない。

と、いうかここまでやめるという選択肢もないだろうに。

「後悔…しないわね？」

「「ああ」」

「…なら私から言うことは何も無いわ。勝手にして頂戴」

そういつて紫はスキマの中に消えた。

まだ、やるべき事がある…

「…さて、続きをやるか」

「ああ、もう時間が無いしな」

翌朝。

紫家で俺達を作るであろう最後の朝食を作り終えた。

「本日はお日柄もよく、最高の一日になりそうだ」

零がふとそんなことを呟いた。

荷造りも既に終わらせている。

見送りに藍は大泣き、紫ですら寂しそうな顔をしている：気がした。まあ、まず間違いないけどな。100年一緒に暮らして表情が分からないわけないだろう。

「さて、俺達はもう行く。だがその前に・・・紅」

「応」

自分の手元に傘を転移させてくる。

只の日傘に見えるが、見るものが見れば確実に驚くであろう日傘を紫に差し出す。

「：これは？」

「俺達が紫に会ってから今日でちょうど百年。その記念さ、大事にしてくれ」

「零が材料を削ってから、妖気をたっぷり込めて作った日傘だ。耐久性は抜群だぜ」

実は多少の空間の固定も入っている。

多少でもないか。鬼の力でもそう簡単には壊せないほどに、強靱な素材、空間の固定による形状の固定。

固定したといっても勿論閉じること出来るし開くことも出来る。実は固定というのは万能…まあ、ここ10年で気付いたのだが…なんと言えいいのかだろうか。

まあ、これで伝わると思えないのだが、その場所に固定することと形を固定することが出来る。

その場所に固定を使用して動きを止める。形を固定することによって物を壊れさせないようにすることが出来る。

まあ、驚くほど強靱だと言うことが分かって貰えば良い。

「…ありがとう、大事にするわ」

「ああ、大事にしてくれなかったら泣く」

記憶違いでなければ紫にありがとうと初めて言われた気がする…零は知らないが。

「藍…お前泣き過ぎだっ」

「だって、えぐっ、零兄しゃまと紅兄しゃまが…」

もう50年近く経っているのだが…兄しゃまという言葉は直らない。まあ、1000年後にはこの幼い感じもなくなるんだろう。

早く見てみたいものだ…

「二度と会えないわけじゃないんだから、な？家のことはお前に任せたぞ」

「…あい」

「じゃあな、また。あ、あとこれも渡しておくぞ」

零が二枚のカードを紫と藍に手渡す。

…あれ、か。

「これは何？」

「VIPカード。俺たちのここに来る時はそれを持っているとい
ことがある。じゃあな」

「ええ、また」

そりゃ、いいことがあるだろうさ、うん。

紫にとってはそこまで関係ないかもしれないけどな。

紫家を出て、北へ飛ぶ。

振り返って見ると紫がとても悲しい顔をしていた。

藍は相変わらず泣いていた。

「はい、着きましたね。どう見ても人里です、本当にありがとうございます
ございました」

「お前今から電波発言禁止な」

電波は誰も見てないところで受け取れ。
じゃないと只の痛い人だ。

…もともとコイツ痛いけど。

「お前は俺に死ねというのか！」

「現在進行形でそう言ってるんだろ」

コツコツ溜めていた金で人里の土地を買い取った。
別に旅に出るわけではない。
と、というか旅に出てもやることねーやん。

「よーし、じゃ創りますか」

「よろ」

零がパン、と手を合わせて地面に手を付ける。
その姿は某錬金術師を思い浮かばせる。
目の前には一つの建物が出来上がっていた。

「あっという間、あっという間、あっという間、げきじょーおおー
おおー♪」

「どんだけ懐かしいねん」

「いや、なんかふと頭に浮かんだ」

とりあえず、名前を考えようか。

「さて！料亭の名前を決めようか！」

零も同じ考えだったらしい。

と、いか何で俺達事前に決めておかなかったんだろう。

あ、ちなみに零がいった通りに俺達は料亭を作るつもりです。

旨い、早い、安いがモットーの。

とりあえず名前…零と紅の料亭だから零紅亭でいいかな。

「零紅亭」
れいこうてい

「お前のネーミングセンスは皆無だな」

「だってめんどくさいんだもの」

シンプル・イズ・ザ・ベスト。この言葉を零は知らないのだろうか？
複雑に考えたところでシンプルに勝つものはない。

「ちなみに俺が考えてたのは『Fantasy village』
だぜ！」

「ありきたり乙」

…ただ英語にしただけ。結局シンプルだしいいか。

「お前絶対意味分かってねえだろ」

「馬鹿にすんな、『幻想郷』だろ？」

「よし、じゃあ決定の方向で」

「いいよ、めんどくさいし」

最初は知名度なんてないのだろうが…とりあえず、俺達の店の始まり、か。

別れ（後書き）

そういえばとあるCMを見て思ったことがあります。

『人生で始まりと終わりを直線でつなげる道はどれだけあるのか。選んだ分かれ道が貴方の人生』

ふと、いいなあ。と思っただけです。

自分は：どんな人生を歩んでいるのでしょうか？

分かれ道をどちらに進むか。それによって人生は変わる。

その分かれ道によってパラレルワールドが生まれるのでしょうか。

自分は自分の選択に後悔をしたことがあります。

もし：自分が選択していないというパラレルワールドがあるのなら
ば自分はどのようになっているのでしょうか？

あれを選択していなかった、あれを経験していなかった、そんな自分
はどのような自分なのか？

たまに、気になります。

特に気にしないでいい話題ですね。

爪

「…やっぱり、開店直後は人来ねえよなあ」
「紅、それを言わないでくれ。悲しくなる」

…あれから一日。俺達はすぐに店を開いた。
が、しかし！新しく出来た店、しかも料亭に来る勇気のある奴はい
るのか？

否！いない！（反語）

いや、まだ開店して直後だから来ないと決まったわけではないぜ？
希望はまだある！

…自分で言ってて悲しくなるな。

「零、人いないんだから一人でいいよな。一人で対処しきれない人
数来たら呼んでくれ、すぐに戻る」

「…は？どこいくんだお前」

「ちよっと、やりたいことがある」

「外行くんじゃないだろうな！」

「結界の外、と言う意味での外ならば否定しておこうじゃないか！」

そういつて俺は外に転移する。

とあることを試したいのだが…

誰も居ない開けた場所と言ったら紫家の庭ぐらいしかない。

…昨日、家を出たばかりなんだがなあ。

まあ、いいか。

「あら紅、帰ってきたの？」

今の現在地は紫家の庭。

俺よく躊躇なく戻ってこれたな、末期か？

まあ、紫家の庭で俺に話しかける人と言えば紫か藍。この声と口調から紫だろう。

「ちょっと試したいことがあってな…」

「何か壊さないようにね」

「…すまない、保障は出来ないが善処する」

「なら庭は貸せないわ」

「物事に確実はないだろ？まあ、壊しても壊れる前にすればいいだけだからいいだろう？紫」

「まあそれもそうね…でも注意はしてね」

「勿論」

「なら何も言うことはないわ…見ようかしら」

「構わないけど…まあ、いいか」

やりたいことというのは…

今現在の幻想郷にはスペカルールはない。

弾幕、というものの自体は存在するがそれが主体な訳ではない。ならばどうするか？弾幕ではない攻撃手段を作れば良い。

と、いつでも零との修行で身体能力も上がっているわけだし、実質できてできなくても良いものなんだが…
すこし、やってみたいものがあるんだ。

「ちょっと、離れててくれよ」

「何をするのかしら」

「そいつは見てのお楽しみ、さ」

かなり集中しなければ出来ない作業だろう。

地面に埋まっている土を目の前に転移させ、それを圧縮してとある形を作り出す。

球状なら楽なんだが：作りたい形はそうではない。

もっと威圧感があるもの。

イメージとしては：武器として使用される爪だ。

大きめに作りたいのだが今回はお試しだ。

1? ぐらいの土しか出さなかったため、小さい。大きさをなにかと比べて言うとしたら：

LサイズのTシャツぐらいだ。ちっちゃい。ちなみに今現在も圧縮し続けているため、形が崩れることはまずない。形が崩れてもすぐ元にもどるだろう。

：それでもちっちゃいに変わりはないのだが、それでも初めてにしてはよく作れた方だと思う。

「：それがやりたかったこと？」

「本来はもっと大きいのを作りたかったんだがな：5 m ぐらいの」

「それは：作れるの？」

「修行次第、だろう。コイツがどれだけ堅いか試していいか？」

「別に構わないわ」

「よし、じゃあやるぞ」

作り上げたものを掴み、思いっきり地面に叩き付ける。

壊れなかった、よし。

次は自分の力ではなく空間を移動させる力で思いっきり地面に叩きつける。

：圧縮と移動の併用は結構しんどい、な。

特に圧縮の力を強くしてるし、移動速度もかなり速くしている。

まあ、爪は碎けることがなかった。

大分強いな。

爪の切れ味がどれくらいか試してみたいんだが…さすがに、だめだろうな。

庭とか斬るわけにはいかないだろう。

「随分堅いみたいね」

「ああ、自分でも驚きだ：爪の斬れ味も試してみたいところだがそうもいかないだろう。そろそろ店に戻るよ」

「あら、いつてらっしゃい」

「ああ、いつてきます」

「なんか：インパクトなかったわねえ」

「気にしたら負けさ」

そういつて店の裏口に転移する。

裏口から店に入ると：

「おい紅何やってたんだよ…客かなり来てるぜ？」

「：開店、初日ですか？」

「だいたい7人」

「随分と多いことで…着替えて来る」

時間を止めて部屋に行って着替える。

この服には途轍もない効果があるんだぜ！

頭装備…バンダナ（オートヘイスト×4）

胸装備…パーカー（オートヘイスト×4）

腕装備…中華包丁（オートヘイスト×4）

腰装備…エプロン（オートヘイスト×4）

足装備…ジーンズ（オートヘイスト×4）

オートヘイスト*20すごいです、パネエです。

そして厨房に戻り時間を動かし始める。

そして（以下略

「ああ、そうだ紅」

「なんだ零」

「普通に火使ったんじゃオートヘイストに間にあわねえから魔力で火だしてくれ、できるだろ？」

「…霊力ばっか修行してたから魔力なんて…ああ、使えるな、うん」

…使えるには使えるんだが、実は慣れてない。

空間の温熱を使って熱することにしたのだが、魔力の使用に慣れるのも必要かもしれない。

…やるだけ、やってみるか。

「使えるだろ？さ、サボった分働いて貰うぜ」

「了解だ」

スーパーヘイストタイム入りまーす！
…ああ、やっぱり俺の気狂ってるなあ。

爪（後書き）

そういえば…これ書いてて自分のスペカ一切考えてないことに気付いた。

そこで即効で考えて見たのが土を使った爪。ただ弾幕にはならないよなあ、ってことで却下。

スペカらしいスペカ考えて見るとどんなになるだろう、ということとで考えてみた。

不可視「虚空に染まる紅」

120秒間の耐久スペル。

空間の歪曲により自分の姿を見えなくする。このとき空間の歪曲により自分に一切攻撃は届かない。

赤色の米粒弾を全方位に放ち、その赤色の米粒弾が通った所からは空気を圧縮した見えない弾がランダム方向に発射される。

この空気の弾は一番小さい弾の大きさよりも少し小さい程度。また、下に落ちる弾。

30秒が経つと米粒弾の数が1.5倍。60秒が経つと元の数の2倍、90秒が経つと米粒弾が大玉になり、速度も上がる。

残り10秒で空気の弾の大きさが米粒弾程度になる。

…書いてて思いました。

どうやって避けるんだ！

どう考えてもスペカ決闘には使えませんねえ。

まあ…空気の弾が落ちるタイプだから上にいれば避けれるのだろうか？

…それもないでしょうねえ。

…と、いうか紅の能力で避けれる弾幕は作れるのか？

…作れる、ですかねえ？

悲しき人

俺達の店は開店数日後にはかなり繁盛していた。

信じられな―い、とだけ言っておきたい。

まあ、来る人数が日増しに増えているのは鼠算みたいな感じだろう。

人気の理由は安い 早い 旨い だと思う。

安いは…まあ、安い。

早いとは異常。オートヘイスト*20により、時間がかかる料理でも10秒。

時間が掛からない料理は5秒あれば出せる。

旨いは…旨いんだろう。自分達では良く分からん。

ちなみに幻想郷の人々…と、いうかこの時代の人々と言うべきだろうか。

生活リズムが早く、6時頃には大体食べ終わる。

店の開店時間は8…00～21…00。

人々の生活リズムが早いから開店時間は～21…00じゃなくて～19…00でいいと思うんだ。

一番の理由はそれじゃないが。

「零～おかわり～♪」

「てめえ！いい加減にしろや！」

「幽々子にVIPカードを渡したのはあなた、自業自得よ」

「限度つてもんがあるだろが！」

ゆゆさまがこれでもか、と言うほど食べるのが理由。

零が怒るのも分かる。俺も怒りたい。

今は20…00。こんな時間でもゆゆさまと紫はいる。

ちなみにVIPカードとはこの店で払うべき料金が無料になるカード。

零いわく原作キャラ十蒼と風雲とかいう天狗には渡したらしい。なお、VIPカードを渡しても赤字ではない。原材料費は無料だから。

零が創ったもので、一切費用は掛かっていない。

ああ、このチート能力保有者め、日常でも使えるとかうらやましい。そう思ったとき、ガラガラという音が聞こえた。

誰かが入ってきたらしい。

こんな時間に、か。珍しいな。

「いらっしやい、何にしますか？お品書きはそちらです」

「いえ、食事をするために来たのではありません。あなた達に会いに来たのです」

「とりあえず、なんで？と聞いておこうか」

「私は稗田阿一、この幻想郷の歴史を書かせてもらってます」

稗田：？ああ、阿求の転生前、か。

幻想郷縁起を書いている人間。

幻想郷縁起に関する記憶のみ引き継いで転生する。

転生は本来許されない行為であり、閻魔との交渉を行う。

人生の大半を転生のために閻魔との交渉と幻想郷縁起を書くのに費やしている人間。

いや、大半ではないのかもしれない。全て、か？

：どちらにしろ、悲しい人だろう。

「…で？」

「はい、それで新しく出来たこのお店と、あなたたちの事を聞いて
おこうかと思ひまして」

聞かれるのはめんどくさいな…まあ、転生するとはいえいずれ原作
キャラになるのには変わらない、か。

無料でいいからなんか作ろう。

…鯖味噌でいいか。

台所へ歩いて移動する。転移したら何言われるか分かったもんじゃ
ねえ。

「よつと、出来上がり」

数秒で完成。

とりあえず持っていこう。

「いえ、『妖怪の賢者』八雲紫と『幽冥楼閣の亡霊少女』西行寺
幽々子と親しげに話している人間を、ただの人間とは解釈できませ
ん」

ただ、知り合いというだけの人間という解釈もできるぜ？

妖怪が絡んできて、その妖怪と人間は仲良くなってしまった。

人間はただの人間で、妖怪がなぜただの人間と仲良くなったかは分
からないが、所詮ただの人間。

…俺達は違うが。

「∴反論できねえ」

台所から出るとこんな声が聞こえた。

とりあえず阿一に鯖味噌定食を勧める。

姿から判断すると∴歳は十数歳ってところか。

たしか稗田は寿命が30才までだったと思う。原因はしらんが。。
人生の半分を過ごし、そろそろ閻魔との交渉が始まるんだろうな。
っと、渡さないと。

「まあ、料亭に来て何も食べないというのもアレですから、お金はいいんで食べてください」

阿一の目の前に料理を置く。

するとお金を貰わないのは申し訳ないと思ったのか、それとも看板に書いてあったことが怖いのか、阿一は迷っているようなそぶりを見せた。

ちなみに看板に書いてあったことは、これだ！

“料亭『Fantasy village』は早い、安い、美味しい
をモットーとしています。

もし、料理に不満があるようでしたら、遠慮なくお申し付けください。

なお、食い逃げをした場合は、命の保障は出来ませんので、ご注意ください”

食い逃げをした場合は、命の保障は出来ませんので、ご注意ください。

これだろう。まあ、俺が無料でいいと言ってるのでひどいことはしないが。

食い逃げをした奴は零が妖怪の山に埋めていた。が、あまりにひどいと思うので零が埋めた10分後に俺が救出した。

ちなみにしっかりと釘は差しておいた。

そのときに言った言葉が

「…今回は始めてなので助けますが、次はどうなろうと知りませんよ？むしろ、自分が手を下すかもしれないですね。値段は安いんですからあれぐらい払いましょうよ」

常人では発狂しそうな、でもギリギリ発狂しない殺気を当てながら言った。

多分、食い逃げした人にとってそのときの俺の顔は一生のトラウマになるだろう。

食い逃げした人が次に店に来たときはしっかりと料金を払っていた。そのときに呟いていた言葉が、

「あの恐怖と引き換えにこの値段と考えたら安いもんだ…」

…そこまで、怖かった？

「…おいしい」

っと、思い出に浸っている間に阿一が食べていたようだ。

「それはどうも、うちは早い、安い、旨いがモットーですから。看板は見たでしょう？」

看板とは…わかるだろう？

ちなみに阿一とは打ち解け、普通に話すようになった。

紫が普通に秘密をバラし、阿一に驚かれていた。

零は風雲とやらの勝ったことで。

俺に驚かれる要素は…あれ、なんだろう。

能力を7つ持つてること？それとも紫という大妖怪と共に100年も住んでいたことか？

それは零も当てはまるな…

そう考えたら俺単体で驚かれる要素ないんじゃないか…？
軽く落ち込んだ。

「つと、話し込んでしまったな。もう10時じゃないか」

「あら、もうそんな時間でしたか。それでは、私はこれで失礼します」

…ん、もう10時だったのか。

阿一は普通にドアを開けて出て行った。

「あいよし、また来てねー。さて、お前らも帰れよ」
「わかったわ、また明日ね」

紫もスキマを開き、帰った。

：紫がドアを普通に開けることってあるのかなあ？

まあ、皿でも洗うか。

台所に転移して洗い始める。

「幽々子、なぜ帰らない？」

零のこの言葉が聞こえた。

あれ、ゆゆさま帰らんの？

ちなみに、会話は普通に聞こえる。

「それがねー、こんな時間までおしゃべりしてたもんだから、帰ったら妖忌に朝までお説教されちゃうわ。そんなわけで、今晚泊めてくれないかしら？」

：はあ、そうか。皿洗い終了。

「：まあいいや、紅ー、今日幽々子泊まるって」

普通に聞こえてる：ああ、ありえねえよゆゆさま。
とりあえず転移してゆゆさまに話し掛ける。

「幽々子はさー、男二人いる家に泊まって、襲われるとか考えないの？」

俺達はそんなことしないけどさ。

「あら、そんなことを考えていたのかしら？」

いや、一般常識的にな。

「いや、男二人の家に泊めてっついていえるこいつの度胸が底知れねえ
って思っただけだ」

「おお、俺と同じ思考回路してる。さすが心の友よ」

：なんかきもい。主に心の友よって言う言葉が。

「：まあいいわ、泊めてくれるのよね？」

「「私は一向に構わんッ！」」

次の日、白玉楼に覗きに行くと見るとゆゆさまが妖忌にこってり絞

られていた。
…哀れ、ゆゆ様。

悲しき人（後書き）

阿礼は転生して、人生の殆どを転生のための交渉と幻想郷縁起に費やし、人として楽しめるものを楽しんでいない、というイメージが自分にはあります。

阿一、阿爾…というふうに転生しますが、すべて阿礼の意志なので苦痛ではないのでしょうか。

苦痛ならば…悲しい人、苦痛ではないのでも周りから見たら悲しい人に見えるでしょう。

なんか、そう思いました。

鬼！攻め！

俺達の店には定休日がある。

毎週水曜日。

と、言っても店自体は休まない。

零の能力で俺と零の分身を作り、分身が仕事をする。

…ああ、ほんとこのチート能力保有者め。升だ升。升めコンチクシヨウ。

今日は定休日なので自分の部屋でまったりとPC（勿論自作）を。オンラインゲーム楽しいよオンラインゲーム。

「何の用でしょうか？大妖怪八雲紫様。私めは今から昼寝をする予定なのですが」

ふとこんな声が聞こえた。

零の所に紫が来たのだろうか？

「昼寝なんてしている暇ないわ、緊急事態よ」

「俺の眠気の方が緊急事態だ」

…漬物がきれたとか？

ってそれなら俺の所にくるか。

なんで零の所に？

ってというか零そこまで眠いか。夜しっかり寝ようぜ。

「鬼が攻めて来るわ」

「何い！」

…ふーん、結界張つとした方がいいな。
とりあえず零の部屋に行きながら張ろう。

「いったいいつ攻めて来るんだ？それによって大分対策を練れるんだが…」

「見れば分かるわ」

「おいおいおいおい、洒落にならねえな。もう見えるところまで来てるじゃんか」

…張り始めて正解だったな。

それにしても人里全部囲う結界を作り出した。

…くそ、維持が辛い。

できれば戦いたくないもんだ。

「…時間にしてあと十分ってところか。ちょっと紅呼んで来るわ」
「いや、その必要は無い」

零の部屋のドアを開ける。

…ああ、見えるよ。鬼が見える。

すぐ近くって訳でもないが、俺なら見える。

本当に鬼がこっちに来るまで後十分って所だな。

「話は？」

「聞いた。しかしなぜいきなり鬼が攻めて来るんだ？」

「：噂によると、鬼子母神が幻想郷に入り込んだらしいわ」

「「うそーん」」

：ん？それで何故鬼が攻め込んでくる？

幻想郷で鬼狩りが始まったという噂は聞いていないが：

ま、考えても分かることじゃない、か。

「俺この料亭壊されたら鬼皆殺しにするわ。言葉通りの意味で」

「あなたなら本当にやりそうで怖いわね。私としては、出来るだけ
穏便に済ませたいのよ」

「けど、結局理由は分からないんだろ？」

「ええ、戦いは免れないと思うわ」

「なら、方法は一つしかないな。鬼が人里に入る前に食い止める。

紅

「ああ、もうやっている。紫も重ねろ」

空間と時間と境界。この三セットの結界を突き破れる奴はいるんだ
ろうか？

これで並大抵：並じゃないな、特の鬼あたりも入れないと思う。
神ぐらいの鬼じゃないと：

「…………おし、組み終わった。じゃあ行くか」

実際には組み終わった訳ではなく、霊力をとことんつき込んでただけ。

これで維持に集中しなくても三時間は持つ。

…霊力三割ぐらいもってかれたけど。

「おーけー、武器はいるか？」

「んーいらね。徒手空拳の方が慣れてるし」

「私は手伝ってくれそうな妖怪を呼んで来るわ」

………

………

…

「連れて来たわよ」

メンバーは…

俺 零 紫 幽々子 妖忌 天魔 幽香

ってところか。

天魔初めて見た。

「よし、じゃあ極力殺さないように。特に幽香、殺戮禁止な」
「わかったわよ。よほどしつこい奴以外は殺さないわ」

「こっちは七人。一人頭九十人ってどこか。いけるな？」

…ごめん、俺自信ない。

「私はいけるわ」↑紫

「わしも楽に行けるじゃろう」↑妖忌

「我輩が負けることなど無い」↑天魔

「お前俺に負け認めたじゃん」↑零

「死に誘うのは反則かしら？」↑幽々子

「ひとまず殺さなければ何をしてもいいんでしょう？」↑幽香

「…まあ頑張るさ」↑俺

死に誘う…殺すことになるからだめだろゆゆさま。

ああ、もう。

鬼倒すのめんどくさいなあ！

っていうか鬼が攻めてくるんだ。

攻めてくる相手に人道的手段なんて、取らなくてもいいよね？

「さてさて、鬼さん到着した模様ですぜ？」

大量の鬼。鬼。鬼。

…本当、人道的手段はいらないよね？

攻めてくる奴らに思いやりの心なんていらないよね？

さて…迎撃だ。

他の人たちも皆動き出してるしな。

…よし、修行はじめた奴使ってみるか。

「…スペカとして使える気はしないんだが…まあいいか」

呟いて転移する。

目に見える範囲ならどこでも転移できるというのは知っているだろうか？

俺の視力は並大抵ではない。そのため今、鬼の軍勢がいるところなら大体転移できる。

と、いうことはだ。鬼の軍勢の上空に転移。

「造形『土からの贈り物』」

土の中で槍やら斧やら爪の形に土を圧縮し、地上に転移。

結界を張って、更に霊力までつぎ込んでいるためあまり大きいのは作れない。

精々人の体ぐらいの大きさ。

万全の状態でも2.5mぐらいのしか作れないんだが。

それを鬼達に叩きつけたら鬼達目掛けて振り回したり…

殺しはしないが倒しはする。

ちなみに五日ぐらい訓練したらコツを掴み、すんなり扱えるようになった。

さあ、肉弾戦でも鬼達を倒そうか。

「おーにさーんこーちら、あーそびーましょー!」

まるでと○○ちみたいだな、俺。

少年ふるぼっこ中：

大体：七十ぐらいか？倒した数は。
まだまだだ：！

「：紅！聞こえたらこっち来い！」

「聞こえてる：よっと！」

傍にいる鬼を蹴り飛ばし零に近づく。

「さっきから見ていると、鬼子母神と鬼の四天王がいない」

「そういえば：零！人里の反対側に何か向かってきている！」

「ああ！俺も感じ取った！あと頼んだぜ！」

零は飛びたった

それを見て俺は：歪んだ笑みを浮かべる。

「不可視『虚空に染まる紅』」

耐えられるものなら、耐えてみる！

ちなみにこれはスペルっぽく宣言してるが、スペルではない。

そのため多重で使っている。

まあ、限度こして出なくなったら困るから力を使う歪曲は使用してないけど。

さあ、遊ぼうぜ、鬼さんよ！

鬼！攻め！（後書き）

：書くことないなあ。

そういえば紅のキャラが良く分からなくなってきた気がする。

自分で書いてるんだからなんとかしろ！って話ですよね。

なんとかします。はい。

紅人蒼鬼

周りの鬼を駆逐し、移動し駆逐し、移動し駆逐し…を繰り返していったところ幽香の所までたどり着いてしまった。
とりあえず状況確認でもしとくか。

「…幽香、どれぐらい倒した？」

「大体100ぐらいじゃないかしら。人と違って鬼は強靱で虐めがいがあるから時間かかったわね。と、いつでも私よりはずっと弱いけれど。この程度なら1000体いても負ける気がしないわ」

…ありえねえ。いや、幽香だからありえるのだろうか？

埋まらない力の差を感じるZE☆

「お前に比べりゃ大体弱いだろう…俺は能力使っても負けるし、零だって能力なきゃ負けるだろう」

「そうね…で、紅はどれぐらい倒したの？」

「大体100ぐらいか？」

「あら、少ないわね。能力使ってるんでしょ？私は能力使ってないから紅よりは少ないと思ったのだけれど」

「お前と同じだよ…数は。と、いうか俺はお前みたいなおかしい肉体能力は持ってない。しかも結界の作成に大体霊力三割は持ってかれてる」

「霊力ないなら魔力とか使えば良いじゃない」

その発想は無かった。

…でも霊力が一番使い慣れてる。魔力とか使って失敗したらシャレにならん。
マジメに。

「霊力が一番使い慣れているんだ。無茶言わないでくれ。じゃあ俺は移動するよ」

そういつて逃げるように転移する。

見える範囲で、鬼が多い所。

紫の気配もするが問題は無いだろう、きつと。

「な、なんだよこれはっ！助けてくれ！」

「気色わりい！なんだよこのスキマ！うわ、飲み込まれる！」

「気色悪いとは心外ね、害は無いわ」

「うあああああああああ！」

…地獄絵図でした。

鬼が紫のスキマに飲み込まれかけ、助けを求めて鬼に捕まる。

その鬼は助けようとするが逆に引っ張られて飲み込まれる。

…と言うのが様々な場所で起きていた。

「…大分惨いな、紫。鬼ですら恐怖してるぞ。まあ、俺も始めてのスキマは恐怖でしかなかったから鬼の気持ちは分かるが」

「あら紅。裏側に四天王と鬼子母神来てるみたいだけどういの？」

「零が行ってるから特に問題は無いだろ」
「とりゃあ!」

鬼が俺に向かって殴りかかってきた。
随分可愛い掛け声だことで。

「この惨い状態を更に惨くしてみるかな。空砲『エアショック』」

…おー、殴りかかってきた鬼含めて50体ぐらいの鬼が軽々しく飛んでった。見てて気持ちが良いな、うん。

エアショックは周りの空気を圧縮、解放し衝撃を一方向にまとめて放つと言う技。

で○じろう先生の空気砲の超強力バージョンって考えて貰えばわかるかもしれない。

ちなみにまとめるときに太さを調節することが出来る。

細くしたら威力が上がり、太くしたら威力が下がる。

極限まで細くすると多分鬼の体も貫通する。

現在鉄板の貫通を確認してる。まあ、集中して何とかっていう状態だし使えるとは思えない。

それに殺しはしないから太い状態で十分ってことだ。

「…私よりひどくないかしら」

「紫のは精神的なダメージが大きすぎるだろ。俺のは飛んで終わりはいさよならってだけだ」

「それにしてもかなり減ったわよ?」

「あー、うん…ん?」

零が：死にかけてる？あいつの霊力がとても弱く感じる。

今までこんなに弱く感じたことは無かったから：やはり死に掛けるんだろうか？

あー、あいつの近くに蒼の気配がするし。

蒼の速度でも舐めてたか？常識を超えた速度で殴られて体吹き飛んだか貫かれたか：

ま、様子見れば分かるか。

「どうしたの？」

「ちよっと零の所行ってくる。死にかけてる気がする、というか確実に死にかけてる」

「そう、いつてらっしゃい」

「いってきます」

零の所に転移して、零の状態を見て即座に時を止める。

零の状態は腹は貫かれ、いま蒼に止めを差されそうなところだった。：こんな状態になることぐらい予測しておけ。物事は常に最悪を考えて行動すべきだ。

つーか零がこんな状態になっているのに何も感じない俺はなんなんだろうな？

まあ、ここまで酷くやられているんだ、何か声を掛けないのもあれだろう。

「こっ酷くやられてんな、零」

「う、が…ぎ」

「喋るな、今治すからじっとしてろ。『時間逆流《Backflow at time》』」

ふと英語が頭に浮かんだんだが：まあいいか。ふと言いたくなっただけだし。

っていうか時間逆流で直るのかな？ 咲夜さんの能力で時間戻しても物までは直らないって言う噂を聞いたことがないでもないんだが。おお、直った。と、いうか戻った。

物体にも適用されるんだな。物体っていうか生命っていうか。

「ふう、下手したら死ぬとこだったぜ」

「おお、成功した」

「この状態で刺したら終了じゃね？」

そういつて零が手にナイフを持つが、無駄だ。

時間が止まっている間に起こったことは起こったことではない。時間が止まった状態では何も起こらない。

と、いうことはだ。時間が止まった状態では何者にも干渉されず、何者にも干渉出来ない。

時間が止まっている間は何も出来ないってことだ。

まあ、ぶっちゃけ斬りたい部分だけ時を動かせば良いだけなんだけどな。

まあ、ソレを簡単に言う。

「無理無理、時間が止まってるってことは全く動かないってことだろ？ ダイヤのナイフで刺しても刃毀れして使い物にならなくなるぞ

？」

「ふっ、お前は俺の能力を忘れたのか？ いや、まあどっちにしろそんなことしないけど」

「さて、俺が萃香ともう一人の四天王倒したから、あとは勇儀の姐さんと蒼だけだ。鬼子母神は俺がやるとして、お前はどっちと戦いたい？」

「蒼の方向で頼む」

「結局能力使ったんだろうな。最後に能力使うぐらいなら最初からやればいいのに。」

お楽しみでの戦いなら最後の最後まで切り札を取っておくという考え方も分かるが、コレは戦争だ。

最初の一手で倒せるなら一手で倒した方がいい。

コイツはソレが分からないかねえ。

「負けたままではいられないってか？」

「：まあそんな感じだ。いいか？」

「勝てる気はしないんだがな。」

具体的な対策方法が思いつかない。

殺すのは嫌だ。かといって手加減してたら負ける。

どうするか：大雑把になら思いついてはいるんだが、それを破られたときどうなるかか思いついていない。

あと、それが成功した時どうするかも思いついてない。

簡単に降参してくれれば楽だが、蒼が簡単に降参するとも思えない。降参しなかった場合にどうするか：それに悩んでいるところだ。

「いいかも何も、俺的には最初から勇儀の姐さんと遊びたいと思ってた。それに俺の場合はやろうと思えば一瞬で終わらせられるし、わざわざ勝とうと思わない」

「おーけー、じゃあ身体能力上げとけ、動かすから」

「ほいっと」

時間の停止を解除する。

と、同時に地面に蒼の拳がめり込んだ。
こええよ。

「…お前の能力か」

蒼が俺に向かって話しかけてくる。

「そゆこと、今からお前の相手は俺だ」

時間の流れを1／10程度にして、本気で蒼に殴りかかる。

ちなみに普通に出せる俺の最高速は亜音速。零より遅い、が俺には時を操る力がある。

時の流れを10／1にすれば速度は10倍。とんでもない速度になる。

大体秒速…2 kmぐらいだ。

その速度に蒼は反応して体を動かしたが、完全には避けきれずに拳は頬を掠った。

お返しのごとく拳を放とうと構えるのが見え、即座に時の流れを1／100にする。

すぐに後ろに跳んで拳を避けたが、蒼がついて来て追撃しにきた。くそ、時の速度1／100でもついてくるってどんな出鱈目な速度だよ！

とりあえず蒼の体を蹴り飛ばす！

が、足を掴まれた…？そう認識すると同時に嫌な感じがしてに体を無理矢理捻る。

体を捻った瞬間に何とか見切れる速度の拳が服を掠った。生地が服から離れる。

マ、マトモにあたったらシャレにならねえ。1／100の速度でなんとか見切れる速度ってなんだよ。

掴まれていない方の足で蒼を蹴り飛ばし、零の隣に転移する。時間の流れも元に戻すのも忘れない。

「零、ここじゃ色々邪魔だろうから移動するわ」

「いつてらっさい、勝てとは言わんが少なくとも死ぬなよ」

「さっきまで死に掛けだった奴がなにいつてんだ。お前のように油断はしない」

「油断しなくとも、負ける可能性はある。最初から殺すつもりでいかないと逆に死ぬぞ」

「はいはい、その言葉、しっかりと心に留めておくよ。じゃ」

「ああ、逝ってこい」

「ちょ！字が違う！」

本当になんとか違う気がしたんだ。つと、蒼がどっかに行ったな。

俺もすぐさま蒼の場所に転移する。

…ああ、ホントに勝てる気がしねえや。

紅人蒼鬼（後書き）

前話で非人道的手段をとっても構わないと思っている紅ですが、結局非人道的手段は取ってません。

所詮現代人。良識が邪魔して意識が飛ぶまで首のみ時間を停止して血が回らないようにするとかはできないのです。

良くも悪くも、優しい。

ですが殺されかねない場合はどうするんですかね？

…自分で書いてるんだから把握ぐらいしろって話ですよね。

鬼外な鬼と人外な人（前書き）

…微グロ？

R15指定しといった方がよかったかなあ…

できるだけグロは抑えてあります。

個人的にはグロは全く感じない。

ですが世間一般的にはグロか？と思ったり思わなかったり。

鬼外な鬼と人外な人

開けた場所：詳しい位置は分からない。

周りを見ると木。森の中か：山の平らな開けた場所か。

よく分からないが、蒼を追っているとこの位置についた。

「紅、私はお前を殺したくはないのだが：降参しては、くれないか」

問いかけのようで、確信を持った口調で蒼が語りかける。

そりゃあ、降参はしないが、本音を言うのと降参したい所だ。

「出来るならしたいさ：でもな、降参したらどうなる？ 目的は知らないが、人里を襲うんだろ？ 黙って見過ごす訳にはいかないのさ。たとえ死ぬとしてもな」

蒼は怖い。嘘でもなんでもない。

光速の1／1000は、とんでもない速度だ。

その速度で腕を振るっただけで俺の体はバラバラになるかもしれない。い。

：それぐらい、常識外の速度だ。

「そうか。では：」

体に寒気が走る。蒼から殺気が放たれているのが分かる。体が硬直する。

鉛みたい体が重い。冷や汗を掻く。頭が一瞬白くなる。

ヤバイ。あいつの殺気は…

100年以上生きてきて、本気ではないとはいえ、零の殺気にも当てられ、幽香の殺気にも当てられ、多少は殺気に慣れている自信はある。

肝も座っている自信もある。

だけど蒼の殺気は…

俺の自信なんて、紙切れ程に感じさせた。

「苦しまないように一撃で——」

マズイ！即座に時間の流れを俺が出来る一番遅い速度、 $1/10000$ にする。

「終わらせて——」

は？時間の流れ $1/10000$ にしたんだぞ？なんで普通に声が聞こえる？

発動していない？それに気付いた瞬間にに時間の流れを $1/1000$

0に変える。

同時に、腹部に衝撃：いや、衝撃なんて生易しいものじゃない。何にも例えられない、何かが腹部にきた。

体が吹っ飛ぶ。意識が遠のく。

だが、気を失うわけにはいかない。

気をしっかりと持った瞬間に、腹部に激痛が走った。

「紅、本当に降参しないのか？」

いつの間に気を失っていたのだろうか？

気がつくと蒼の顔が目の前にあった。すぐさま俺に拳を当てられるように構えているのも目に入る。

横になっていることに気が付き、起き上がる。蒼は特に止める様子もなく、俺の起き上がる様子を見ていた。

体に痛みが走る、が意識を失うほどではない。

と、というか少し痛い程度だ。

降参しないかという問いかけに対してだが：

降参はしない。したら意識を失った意味が無い。

「さっきもいっただろ：降参できない理由がある」

「：そうか」

：仕方ない、人としてやりたくなかったがそうも言ってられないな。

「そうだ、蒼。もう俺は人道的手段をとらないぞ？俺は、一切の性格を捨てる」

結局俺は鬼達に対してそこまで…と、いうか普通に人道的手段を取っていた。

だが…そうしている余裕はない。

仕方が無い、と自分に言い聞かせる。

まさか、交流もない鬼とじゃなくて蒼に非人道的手段を取るなんてな…

っと、感情を込めた思考は終わりにしよう。

「…どういう意味だ？」

「こういう意味だ、恨むな」

蒼の右腕のみを、どこかに転移させる。

蒼の右腕は体から離れる。肩から先が、無くなる。

蒼からしたら何もされずに、だ。

「ぐあああああああ！」

蒼は元々右腕が生えていた場所を、左手で抑える。

俺は時間の流れを1／100にして蒼の腕が生えていた場所を殴りつける。

ぐしゃり、と嫌な感触が手から伝わってくる。

蒼の表情を見るとかなり歪んでいた。
すまない、蒼。…いや、この考え方も、今は駄目だ。
左足も転移させ、立てなくする。
これで立つことすら出来ないはずだ。

「降参しないか？」

「う…ぐ、私はまだ負けを…！」

「なら逆に聞く。その状態で勝てると思うか？」

「可能性は「無いと断言できるぞ、俺には」…何故だ？」

「お前が今すぐ腕と足を元に戻せるなら話は別だ。だが出来ないだろう？俺はすぐに残りの腕と足を切り離せる」

…何も、考えちゃいけない。

何も、そう、何も考えちゃいけない。

何も…何も…何も…

考えたら、壊れてしまいそうだ。

「…そうか。なら負けを認めるしかない…な。私はここに宣言しよう。私、蒼は紅に負け、勝者、紅の望みを果たそう」

…助かった。

これ以上は俺の心が折れそうだった。

やっぱり根は甘い…な。

所詮は現代人、いや、日本人と言うべきか。
人を傷つけるのは…しんどい。

「…じゃあ、俺の望みを言うぞ」
「ああ」

…甘い、かなあ。
日本人には甘いのがお似合い、かね。

「知り合いならいいが、知り合いでもないただの人間を襲うな。人を襲うのが存在価値なら俺達を襲え。あと体を直しても今すぐ俺と戦うな」

「後者は元々思っていたことだ。心配しなくても戦いはしない。望みは前者でいいのだな？お前に特は無いだろう？」

ぶっちゃけ望みなんて無いんだ。
どうでも、いいんだよ。

「くくく…前から思っていたが本当にお前はおかしな人間だな！」

…いきなり笑ってその言葉か。

変人だと言う自覚は十分にあるんだが…改めて言われると傷つくな。

「変人は自覚してるよ…。時間逆行」

蒼の体を俺と戦う前まで戻す。実はかなり残り霊力量もギリギリだったりする。

…意識が、遠のく。

「おい、紅！大丈夫か紅！」

最後に聞こえたのは蒼の声だった。

鬼外な鬼と人外な人（後書き）

所詮、紅は21世紀の日本に住んでいた、一般人です。人を傷つけるなんてことは、基本したくありません。

日本に居た頃は人を本気で殴ることなんてしたことないぐらい、温厚な少年です。

幻想郷に来てから生きるために仕方ない、と常人離れた身体能力を手に入れています。が、それを悪用はしてません。特に何にも使ってません。

精々、戦いとか逃げるとか。

幻想郷にきて強大な力を持ちましたが、逆に恐れています。

世界を壊さないか。空間程度：程度で片付けれる力ではありませんが、時間は特に恐れています。

蒼との戦いで世界の時間の流れを1／100にしたりしてますが、後から振り返って影響は無いだろうかとか悩んだりしています。

影響はないとおもいますが。

終わりの後に（前書き）

短いです。異論は受け付けます。

終わりの後に

意識が戻ったときには良く知る天井が視界に広がっていた。

「ん、んん…家か…って家？」

頭が働かない。俺は何で家に居るんだ？当たり前のはずなのに何か違和感が…

ああ、そうだ、鬼が襲ってきて、倒して、蒼と戦って、勝って…あれ、その後の記憶がない。

「紅、起きたの？」

「紫か？起きたみたいだ。頭働かないけど」

目の前にスキマを開いて現れるBBA！

「失礼なこと考えなかった？」

「頭働かないんだ、何も考えて無いよ」

鋭いな、さすが紫鋭い。

「とりあえず店の準備でもしますかね」

「ダメよ動いちゃ。体はボロボロよ？」

「大丈夫だ、自分の体は自分で分かる。今の俺は霊力不足なだけだ」

ああ、そうだ。蒼の体直して霊力切れ起こして意識失ったんだ。そういえばそうだった。まあ、とりあえず店でも行こうかな。起き上がろうとして腹部に激痛が走る。思わず顔を顰めてしまった。でも起きる。

「ほら、全然大丈夫じゃないじゃない」

「日常生活に支障はないはず」

「そんな激痛が走ってる状態で？」

「ああ」

「そう…」

「ッグ?!」

いきなり腹を殴られた。他の誰でもない紫に。思わず蹲り、自分の顔が歪むのが分かる。

「私程度の力でそんなに痛がるんだからダメじゃない、動いちゃ」

「でもなあ、店が」

「どうせ客なんて来ないわよ？こんなことがあった直後なんだから」

「人里に被害は無いんじゃないのか？」

「被害は無いけど鬼達が攻めてきたという情報はあるわ。外にはでないでしょうね」

「…なるほどね」

「おとなしく寝る気になったかしら？」

「漬物の状態を見るだけ！それだけ許してくれないか」

俺にとって死活問題。あの漬物を…完成させないと！

「ダメよ」

「…接続」

漬物の近くの空間とこの空間を繋いで漬物を見る。
そして1つ食べる。ダメだ、あの味じゃない。
味の調整をしなければ…

「行ってくる」

「寝なさい」

紫の言葉が聞こえたと同時に、俺の意識は闇に落ちて行った。

終わりの後に（後書き）

うーん、最後がなんか気に食わないけど投下。

変わらぬ鬼

傷も直り、俺達は次の日には店を開いた。
襲撃されたからだろうか、人が来ない。

「いらっしやいませー、お、蒼じゃないか」

予想外な来客。鬼が人里歩いていいのか？ま、いいか。

「おい、紅。ちょっとこっちに来てくれないだろうか」

「え、ちょ、蒼どうした？え、ちょ、店があるんだが、零あとは任せたあああ！」

蒼に担がれて何処かに運ばれる。零が此方を見て少しだけ嫌そうな顔をしていたが人が来ないからいいだろう！

………

………

…

「皆、俺を倒した人間、紅を連れてきたぞ！」

「…はい？」

理解が追いつかねえ。んーと、気がついたら地底に居ました。そしてたらいきなり蒼が俺のこと紹介し始めて、っていうか周り鬼だらけだし！

「ほー、こんな若造が蒼を倒したのかあ、意外だねえ。さあ、呑め呑め。私の酒は旨いよお？」

俺に話しかけてきたのは西瓜。じゃない萃香。いやあ、さすがずっと酔ってるロリ鬼。

俺に酒を勧めるとかプツンしちゃうよ？

…さすがにダメだよな、いきなりキレちゃだめだろう。

理性を総動員し、俺の心情を全く顔に出さずに首を横に振る。

「私の酒が呑めないのかい？さあ、一緒に呑もうか！」

「人の話…いや、動作か。ちゃんと見ろ。そして理解しろ。呑まないよ」

冷たい声で話しかける。零いわく俺がキレル、または不機嫌の時は口数が少なくなり、言葉を区切って話すらしい。

言われてみればそうかもしれないな。ブチギレするときは違うが。

ブチギレは誰にも見せたことが無い。

「酒は苦手かい？ 苦手なら克服してみるのも良いと思うんだけどねえ？」

「呑まねえつつってんだろ。いい加減黙れ。角折るぞ」

「折れるものなら折ってみるといいよ。人が私の角を折る？ 無理だと思っけどねえ」

「そうか、なら一文字訂正だ。折るのではなく斬る」

「刃物は持っていないように見えるけど？ っていうか変わらないと思うんだけど？」

「紅、やめろ！ 萃香もやめておいたほうが良い。私は紅に腕と足を斬られた。萃香の角も、おそらく斬れるだろう」

蒼に呼びかけられて頭が冷える。

：ふう。落ち着くか。

「ええ、蒼は腕と足を斬られたのかい？ 戻ってきたときは無傷だったじゃないか。アンタとは始めましてだね。私の名前は星熊勇儀、鬼の四天王が一人、力の勇儀さ。あんたにしつこく酒を勧めたのが伊吹萃香、萃香も四天王さ」

「あー、よろしく。俺の名前は那華川紅で、紅って呼んでくれれば良い。100年程度生きてるただの人間だ」

勇儀が出てきたよ。っていうか居たんだ。
名前は知ってるさ、うん。

「100年？ 人間にしては長生きだね。能力持ちかい？」

「勿論。何の能力を持っているかは言わないけどな」

「話を戻してもいいだろうか？私の傷が治ったのは紅のおかげだと思うのだから。俺の傷を治したのは紅だろうか？」

「ん、そうだ。腕と足ない奴放って置ける神経は持ってねーよ」

「ふーん…っていうかあんた本当に蒼を倒したのかい？酒も呑めない若造が倒したとは思えないのだけど？」

「だったら酒を呑めば信じるのか？」

「無理して呑まなくていいよ。っていうか呑んでも信じないね。私と戦わないかい？」

「…まで、どこからそういう話になった」

「蒼を倒した奴の実力が気になるのは当たり前じゃないか」

「何を持って当たり前なんだ…構わないけどさ」

「おお、いいのかい？じゃあ広い場所に行こうか」

…あれ、俺なんで承諾したんだろう？まあいいや。うん。

勇儀が歩き出したので俺もついていく。

宴会？してた場所から細道に入っていく。大丈夫だろうか？勇儀に5分ぐらい付いていったところで開けた場所に出た。

「さ、ここだよ」

「…広い、がどこだココ」

「どこだろうねえ？どこでもいいじゃないか」

「そりゃそうだ」

「鬼の四天王が一人、星熊勇儀！さあ、始めようか！」

変わらぬ鬼（後書き）

言い訳します。

ムジュラ面白すぎる！

実は自分、ゼル伝ファンなのですがムジュラとかGB、FCとかのゼルダやったこと無いんですよ。

まあ、ムジュラをリアルの3日以内、58時間以内、プレイ時間は20時間ほどでクリアしましたが。

これで64以降は4つの剣＋以外全部やったことになります。

ああ、いつか古いゼルダもやってみたいなあ。

ちなみに明日から旅行です。滝上って知ってますか？

：知らないですよねえ。

力の鬼

「…本来なら楽しむべき戦い、だよな」

「何を言っているんだい？」

「別に…よし、即効で終わらせる！」

「やれるのかい？そこまで私は弱くないよ！」

その言葉を聞いてわざと口元を吊り上げる。

まるでそれでこそ楽しい、と意思表示するように。

…挑発でしかないんだよなあ。

実は俺は霊力が本来の3割も無い。

総霊力量が多すぎて一回寝た位じゃ回復しないんだよ。

ま、いいか。とりあえずは今のことを考えなきゃな。

「造形『土からの贈り物』」

本来なら宣言する必要性は無いけどな。ま、こういうのは気分だ。

地面を大きなつらのような形に圧縮。

それを10本ほど作り出す。

まずは3本、バカ正直に真正面から勇儀に向かわせる。

「こんな攻撃が当たると思っているのかい？」

勇儀は3本とも全て砕いた。が、それで終わるほど俺もバカじゃな

い。

「圧縮」

わざわざ口に出して言ったのは訳がある。

イメージするだけでも出来るんだが、声に出すとイメージするより少ない霊力で強力でできる。

効率がこっちの方がいいわけだ。

勇儀が砕いたものを元に直さずに細かいまんまで圧縮、これもつらのようにする。

数が多いから口に出したほうが良い、ということだ。

「圧縮」

「さっきから何をぶつぶつ言っているんだい？あの程度の攻撃ならこちらから行くよ！」

この圧縮は勇儀の目の前にものを圧縮、ということ。

周りのものは全部集まる。つまりは…

勇儀の周りがある、俺が形を変えたものがそこに集まると言うこと。移動だったらそれぞれを動かさないといけないためにかなりの集中力と霊力を使うが、これならそこまで集中力も霊力も使わない。

あと、囧として事前に作っておいた勇儀に砕かれて居ないつららを5本ほど真正面に打ち込む。

「これをお前は、かわせるか？」

「何を言っているんだい？その程度かわせないわけないだろう？」

「：チェックメイト、かな？」

「この程度で、かい？あんたは気付かせていないつもりかもしれないが、後ろのものなんて：」

「勇儀なら簡単に、砕けるぞ」

「確かに良い戦略ではあるけどそれじゃ勇儀は倒せないねえ」

「え？」

いきなり蒼の声が聞こえた。いや、蒼の声だけじゃなくて萃香の声も。

そしてすぐにズシリ、という音：音と言っているのだろうか、振動が俺の体を震わし、

俺が作り出していたものを全て砕いていた。

「：確かに、強いな。こりゃあ勝てないかもなあ。蒼と同じことをするのは二度とごめんだし、この靈力量で直せる自信が無い」

「技の出し惜しみかい？それで私に勝てると思わないほうがいいよ」

「勝てるとは思わないなあ。ただ、訳も分からず腕を切られるのは嫌だろう？俺も嫌だ。加害者になるのも被害者になるのもな」

：ただ、本当に勝てる気がしないと言うのも事実ではある。

残り靈力量は2.5割ぐらいかあ：本当に、勝てるかなあ？

力の鬼（後書き）

書いていて分かりにくい文だろうと思ってしまった。

1週間、2週間？書いていないと納得が行くもの作れませんね。
ちなみに更新をしなかった理由は、

ジョーカー2面白いね！

…ホントスイマセン。

力の鬼と空気の人

さて…どうするべき、なのかな。

捌くことができない程の小ささで尖った石も砕かれて意味の無いものになる。

っていうかどういふ訳か知らないけれど空気の圧縮も止まっちゃったし。

…いや、驚いたから止まっちゃったのかね。

まあ、本当にどうするべきか。

「…なんだい、もう攻撃の手段がないのかい？この程度で蒼を倒せる訳はないんだから本気を出したらどうだい？」

「…」

何も答えない。

と、いうか答えられない。

だってアレが本気だからなあ。

「こないのかい？ならこっちから行かせてもらおうよ！」

そういつて勇儀が近づいてくる。多少テンパる。

ああ、もう。近づかれると困るんだよ！

「乱射『エアショック乱れ撃ち』！近づいてくんあこっちみんなあ！

恐ろしいんだおこっちくんあ！」

エアショック乱れ撃ちはエアショックをマシンガンのように撃ちまくるという技。

発射間隔もマシンガンのごとく。

周りの空気が薄くなったら遠い所から集めて撃ちまくる。

勇儀はふっとんでは居ないが少しずつ後ろに下がっている。

それを見てとことん撃ちまくる。数限りなく撃ちまくる。

半端無く撃ちまくる。霊力きれるまで撃ちまくる。

「うわ?!」

「いい加減負け認めやがれ!近づけないだろう!」

もう自分でも何言ってるか分からん。

つーかこれじゃ決定打に欠けるな。もうちょっと工夫するか。

「暴風土『吹き荒れる土嵐』」

エアショック乱れ撃ちにさらに小さく固めた石を混ぜただけだがエアショック乱れ撃ちよりは強いはず。

ガガガガガ!と石が壁に当たる音が聞こえる。

多分勇儀にも当たっているだろう。

「ッ?!石?!う、わああああ!」

勇儀が石の攻撃に耐えきれなかったのかふっとんでいった。
いやあ、きもちいいぐらいにフツとんで行くなあ。
でもこれで降参するかなあ？決定打には思えない。
降参するとは思えないな：降参しなかったときには：負ける可能性
がある選択をするか。

「降参するか？しないか？」

「すると：思うかい！」

「思わないな。だからすこし話を聞いて欲しい」

とりあえず吹き荒れる土嵐を放つのをやめる。

「話ってなんだい？」

「このままじゃ決着がつかない。だから決着をつける方法を提示しようかね」

「分かったけど私が不利になったり有利になるのは受け入れられないよ？」

「そんなのは提示しない。まず一つは今のままやる、という方法で、俺としてはこっちの方がやりたい。と、いうか決着が付けられるのはこっちだしな。それで方法は自分が持つ最強の攻撃をぶつけ合って、そして攻撃を止められた方が負けてやつだ」

「私に力の勝負を挑むのかい？私が有利じゃないか」

「俺をただの人間だと思うか？」

「思わないね」

「うん、そこは少しでも否定して欲しかったところだ。ま、良いと

言うことでいいよな？」

「分かったよ」

地面から石を作り出して手の中に転移させて、勇儀に見せる。

「こいつが地面に落ちたら、開始でいいな？」

「分かったよ」

そして石を高めに投げる。

「圧縮、圧縮、圧縮、圧縮、圧縮、圧縮、圧縮……」

石を集めないように、周りの空気を圧縮し続ける。

前も言ったが、口で効果を言うことでイメージするよりも効果が高まる。

それを繰り返したら？ 答えはより効果が高まる。

しばらく圧縮を繰り返していると石が地面に落ちた。

勇儀は石が落ちたと同時にこちらに近づいてきた。

まだだ、後少し近づいてから……

よし、今だ！

「破砲『止まること知らぬ砲弾^{かぜ}』！」

「四天王奥義『三步必殺』！」

勇儀が二歩目を踏み出した瞬間に、圧縮した空気を解放した。

力の鬼と空気の人（後書き）

あれです、ゴーストトリックが欲しくて欲しくてたまらない。

逆転裁判逆転裁判逆転裁判逆転裁判逆転裁判。

昨日、興奮しまくって一回寝たら落ち着いたと思ったけど結局落ち着けてなかった。

落ち着いたと思っていたのは寝ぼけていただけだったらしい。

ちょっと泣きたい。

だっとうずうずしてうずうずして仕方が無い。

後書きの方が本編より打つの早いってなんですか？

見直しながらしないで打ちたいことが打てる。

そういや勇儀の姉さんの三步必殺、とあるサイトですごくかっこいいセリフがあったのですが使うのはダメだろうということで結局スベカのまんまで。

あー、使いたかったなあ、あのセリフ。

力と空気の決着

空気を開放した瞬間に後ろにすごい勢いで自分の体が吹っ飛んでいく、と言う事に気づいた。

余りにも空気を溜めすぎて反動がでかすぎたようだ。

咄嗟に自分の前にある空気を圧縮させて自分の体を引き寄せようとするが、雀の涙。

全くと言って良いほど効果はなく、背中に衝突感と共に俺の意識はブラックアウトした。

「…きな…こ…」

きなこ？ ああ、うまいよねあれ。

大豆からできているっていう話を聞いたが…

昔は木の粉だと思ってたよ。

「おき…か」

んー、なんなんだ…

「起きないか、紅！」

「グアッ?!」

腹部の衝撃と共に俺の意識は覚醒した。
それにしても並みの痛みじゃない。
一体なんなんだ…

「いてーよ…って、蒼？」

「ようやく起きたか。勇儀がお待ちかねだぞ」

勇儀…？ああ、そうか。決闘をしたんだっけか？

…結果は良く覚えてないな。

「…どうなったんだっけ？恥ずかしながら良く覚えて居ない」

「そうか。まあ、結果は勇儀から聞くと良い」

…勝った記憶がないって事は負けたのかな？

うわぁ、イヤだなソレは。

「あんた、本当に覚えていないのかい？覚えてるところまでいいから言ってみな」

「ん…と、お互い一発ぶちかまして勝負決めようって交渉して、大丈夫だって言われて…」

ああ、俺が技放った瞬間に俺が気絶したのか」

よくよく考えると力の制御ができてないって事だよな。ああ恥ずかしい。

まあ、初めて使う技だったし、余裕無かったしな。
…これを言い訳と言います。

「そういうことだね。で、勝負の勝敗だけど…」

「俺が気絶して、勇儀が起きていた。俺の負け確定だろう」

「いや、私の技は完璧にあんたの技に負けた。あんたが技を使いこなしていたら私の負けだったよ」

「力を卸しきれなかったのは俺のせい。戦場でこんな事があったら俺の死は確定だ」

「これはあくまで戦いであって殺し合いではない。戦いで負けたのは私さ」

「いや、戦いは殺し合いの延長戦上にあるものだ。負けたのは俺だ」

さすがに気絶したのにこちらの勝ちだったら後味が悪い。

かと言ってこれゑたいたちごっこだろ。無限ループって怖くね？

どうやりや終わるかなあ…

「とりあえず落ち着け、二人とも」

蒼が止めに入る。ああ、助かったよ蒼！

「なあ蒼。これはどっちの勝ちだと思う？私は紅の勝ちだと思うんだが」

「勇儀。落ち着けと言っただろう？話はそれからだ」

「！…すまない、蒼」

「落ち着いたらいい。で、紅はどうなんだ？」

俺…ああ。どうするかな。

「俺は自分自身の技を卸しきれなかった。俺は意識を失い、勇儀は意識があった。これは勇儀の勝ちだろうさ」

俺がそういうと、勇儀は何か言いにくそうにしていたが、言葉を発した。

「いや…実は私も意識を失ったんだよ…」

「なん…だと…？」

「種族の違いか意識が立ち直るのは早くてね。私の技は完璧に破られたんだよ」

ああ、それで私の技はあんたの技に負けたとか言ってたのか…
いや、それでも俺の負けはかわらんだろ。

殺し合いで両者共に意識を失った場合、先に意識を取り戻したほうが生き残る。

つまり、意識をない方を殺せるという訳だ。

…やはり俺の負けだろう。

「いや…それでも俺の負けだ。意識を先に取り戻したんだっとな」

「いや紅。さつき勇儀も言っていたが、これは戦いだ。技を破られた勇儀は負けだろう」

蒼もこんなことを言ってくる。

…ああ、もう！仕方ない。折れた方が早そうだ。

「…しゃあないなあ。俺の勝ちでいいよ。じゃあ俺は帰る」

「待て！」

帰ろうと肩を回したら何故か勇儀に呼び止められた。

「私は負けた。勝者の願い事を一つ聞こう」

「…えっ？前にそんな約束してないし、別にいいよ」

「いや、勝負に負けたからな。勝者の願い事を一つ聞くというのが決まりだ。あんたもそうしただろう？」

そう笑いかけられては返す言葉も無い。

…凶星だ。

もう疲れたからな、素直に願い事をしようじゃないか。

「じゃあ一つ」

「ああ、なんでも受けてやろうじゃないか」

「俺に萃香が酒を飲ませようとするのをやめてくれ」

「分かった…って、ええ？！そんなんでいいのかい？！」

む、そんなんとは何だよ！

「俺にとっては死活問題なんだよ！酒の臭いを嗅いだけで吐きそうになる。ああ、止めてくれないと俺はノイローゼになりそうだ…」
「そ、それは脅迫だろう…？」
「いえす！」

顔を引きつらせる勇儀に良い顔で言葉を返す。
じゃあ今度こそ帰ろうかね。

「じゃ、今度こそ帰るわ。また遊びにくるぜー
「おう、また遊びにこい」

その言葉を聞いて俺は転移した。

力と空気の決着（後書き）

一応生きてますよ、という報告。
9ヶ月近く放置してスイマセンでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6397j/>

平凡少年が幻想入り ～side kou～

2011年10月6日02時15分発行